

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第40輯

高 向 遺 跡

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 8 9

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第40輯

た こ う
高 向 遺 跡

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 8 9

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



巻頭図版二 F・G区全景







序 文

高向遺跡は河内国の南端部、和泉との国境近くにある遺跡です。主要地方道枚方・富田林・泉佐野線予定地内の埋蔵文化財分布調査によって広い範囲に遺物が散布することがわかっていました。標高150m前後の高い所ながら、なだらかな水田地帯が広がり、河内国の平地の遺跡としては最南端の最高所の遺跡の一つといえます。

高向の地名は古く、「高向」「高向庄」として平安時代の文献資料などにも見られ、この地の開発が中世前期から古代にまで遡ることが想定されていました。発掘調査の結果でも古墳時代から鎌倉時代の建物跡が遺跡の南よりの山裾に見つかっています。いま一つ特筆される調査成果に大量の縄文時代の石器の発見があります。石器の大半は現在の水田の耕作土の中に含まれていたもので、今回の調査ではその耕作土のほんの一部分しか調査できませんでしたが、それでも400点を越える石鏃が見つかっています。南河内の縄文時代遺跡では最大の発掘量です。詳しくは本書をご覧くださいとて、今回の調査成果がこの地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部富田林土木事務所、河内長野市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後の当協会の事業にも変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

1989年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線予定地内に所在する、高向遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は、試掘調査を1987年1月12日から2月10日まで（担当者 宮野淳一）、本調査は3次にわたって実施した。調査期間ならびに調査担当者は以下のとおりである。
1次調査 1987年7月7日～1988年2月15日
調査課第6班 技師 宮野淳一、西村 歩
2次調査 1987年11月16日～1988年3月25日
調査課第2班 主査兼班長 玉井 功 技師 宮野淳一、西村 歩
3次調査 1988年5月8日～1989年2月28日
調査課第2班 技師 西村 歩、駒井正明
続く遺物整理、報告書作成作業は、1989年3月1日～3月31日まで行った。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部富田林土木事務所、河内長野市教育委員会、河内長野市立高向小学校ならびに河内長野市高向の宮浦利治区長をはじめ、地元諸氏には、格別のご配慮を得た。さらに、以下の方々、機関から多大な御教示を得、また当協会職員の協力を得た。記して感謝の意を表する。（五十音順、敬称略）
稲田孝司(岡山大学)、大久保徹也(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)、尾谷雅彦(河内長野市教育委員会)、川越邦江(関西大学学生)、絹川一徳(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)、久保勝正(関西大学学生)、澤田源太郎(大阪府文化財愛護推進委員)、千葉 豊(京都大学埋蔵文化財調査研究センター)、趙 哲済(財団法人大阪市文化財協会)、豊岡卓之(奈良県立橿原考古学研究所)、西村尋文(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)、松田順一郎(財団法人東大阪市文化財協会)、三浦勝彦(大阪府文化財愛護推進委員)、宮本長二郎(奈良国立文化財研究所)、森岡秀人(芦屋市教育委員会)、森本 晋(奈良国立文化財研究所)、安川豊史(津山市教育委員会)、山中一郎(京都大学)、和田秀寿(芦屋市教育委員会)、帝塚山考古学研究所縄文文化研究部会
5. 本書は西村、駒井が共同で作成し、西村が編集を行った。
6. 調査、整理の過程で作成した図面類、写真、出土遺物等は当協会に保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図、遺構実測図、その他の図の北方位は、すべて座標北を示す。
2. 本書で使用している地区割り方法は、当協会が国土座標（第Ⅵ系）を基準に独自に設定したものであるが、本書では便宜的にこれ以外の地区呼称も使っている。具体的には本文中に記す。また座標値は、すべてkmを省略した。
3. 発掘調査および本書記述のレベル高はT.P.（東京湾標準水位）+の数値を使用しているが、本文中ではT.P.+およびmを省略して記述した。
4. 遺構の記号および遺構番号は、当協会の定めた方法に従って調査を進めた。
なお、遺構の記号は以下に示すとおりである。

OB	建物	OG	墓	OO	土壇	OP	柱穴
OS	溝	OW	井戸	OX	その他・不明		
5. 本書では、本文、挿図、写真図版の遺構、遺物番号は一致する。
6. 掘立柱建物の柱穴の位置を表現するため、第Ⅲ章第56・82図の模式図中に記したように、桁行を1～6までの数字で、梁間をイ～ホまでの文字を用いる。たとえば、29-OBの束柱を表現すると、ロ2となる。
7. 実測図の縮尺は、基本的に土器1/4、石器2/3に統一した。ただし、場合によって縮尺を変更した。また図版の縮尺は、土器は任意、石器は基本的に約1/2としたが、場合により縮尺を変更した。
8. 石器実測図は原則的に腹面を右側にし、打点位置とは関係なく刃部を対向させて左側に背面を配した。新しい欠損部は網かけで表示した。
9. 集石遺構、木棺材の焼痕、瓦器碗の煤付着部を網かけで表示した。
10. 本書に記載した遺物の、出土地点、層位、遺構名、法量（残存最大値の場合もある）、色調、胎土の状況、焼成の状況、製作手法の特徴等は、巻末の遺物観察表で示した。
11. 石器の観察表、計測表のうち、刃器の法量は第1長を長とし、第2長を幅とした。刃部の位置等で用いている辺縁の左右は、主要剝離面側の打点を基準とした。
残存計測値は（ ）で括弧している。重量については計測値をそのまま記載した。
12. 土層の色調および土器の色調は、『新版 標準土色帖』7版 日本色研事業株式会社1987 の色片との比較で記載した。

目 次

第 I 章 調査の経過と方法	
第 1 節 調査の経過	(駒井) …… 1
第 2 節 調査・整理の方法	(駒井) …… 1
第 II 章 遺跡の環境	
第 1 節 地理的環境	(西村) …… 6
第 2 節 歴史的環境	(駒井) …… 8
第 III 章 調査の成果	
第 1 節 基本層序	(西村) …… 11
第 2 節 A～E 区の調査成果	
1. 包含層出土遺物	(西村・駒井) …… 21
2. 遺構	(西村・駒井) …… 36
第 3 節 F 区の調査成果	
1. 包含層出土遺物	(西村・駒井) …… 49
2. 遺構	(西村・駒井) …… 72
第 4 節 G 区の調査成果	
1. 包含層出土遺物	(西村・駒井) …… 91
2. 遺構	(西村・駒井) …… 95
第 IV 章 まとめ —高向遺跡の石器—	(西村) …… 112
遺物観察表	122

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	2
第2図	地区割り模式図（1）	3
第3図	地区割り模式図（2）	4
第4図	河内長野市位置図	6
第5図	調査地付近地質図	7
第6図	調査地付近の石川谷横断形	7
第7図	周辺遺跡分布図	9
第8図	A～C区西壁土層断面図	11
第9図	D・E区西壁土層断面図	12
第10図	A～G区土層断面模式図	13～14
第11図	F区土層断面図	15
第12図	G区（46-OX）土層断面図	16
第13図	A・B区遺構配置図	17
第14図	C区遺構配置図	18
第15図	D区遺構配置図	19
第16図	E区遺構配置図	20
第17図	A～E区包含層出土遺物実測図（1）	22
第18図	A～E区包含層出土遺物実測図（2）	23
第19図	A～E区包含層出土遺物実測図（3）	24
第20図	A～E区包含層出土遺物実測図（4）	26
第21図	A～E区包含層出土遺物実測図（5）	27
第22図	A～E区包含層出土遺物実測図（6）	29
第23図	A～E区包含層出土遺物実測図（7）	30
第24図	A～E区包含層出土遺物実測図（8）	31
第25図	A～E区包含層出土遺物実測図（9）	32
第26図	A～E区包含層出土遺物実測図（10）	33
第27図	A～E区包含層出土遺物実測図（11）	34
第28図	A～E区包含層出土遺物実測図（12）	35

第29図	1・2・3-〇〇平面図・断面図	37
第30図	1・2・3-〇〇出土遺物実測図	38
第31図	C区暗渠配置図	39
第32図	暗渠出土道標実測図	40
第33図	4-〇X平面図・断面図	41
第34図	5-〇X平面図・断面図	42
第35図	6・7-〇S平面図・断面図	43
第36図	8-〇X平面図	44
第37図	10・11-〇〇平面図・断面図	45
第38図	12-〇B平面図・断面図	46
第39図	F・G区遺構配置図	47~48
第40図	F区包含層出土遺物実測図(1)	49
第41図	F区縄文土器分布図	50
第42図	F区包含層出土遺物実測図(2)	50
第43図	F区周辺石器類分布範囲	51
第44図	F区石器類平面分布図	52
第45図	F区石器類等量線図	57
第46図	F区包含層出土遺物実測図(3)	63
第47図	F区包含層出土遺物実測図(4)	64
第48図	F区包含層出土遺物実測図(5)	65
第49図	F区包含層出土遺物実測図(6)	66
第50図	F区包含層出土遺物実測図(7)	67
第51図	F区包含層出土遺物実測図(8)	68
第52図	F区包含層出土遺物実測図(9)	69
第53図	F区包含層出土遺物実測図(10)	70
第54図	F区包含層出土遺物実測図(11)	71
第55図	13-〇B平面図・断面図	72
第56図	F区建物柱間模式図	73
第57図	15-〇B平面図・断面図	74
第58図	16-〇B平面図・断面図	75

第59図	16-OB出土遺物実測図	75
第60図	17-OS断面図	76
第61図	17-OS出土遺物実測図	76
第62図	18-OB平面図・断面図	77
第63図	22-OB柱根検出状況	77
第64図	22-OB柱根実測図	78
第65図	23-OB出土遺物実測図	78
第66図	22-OB平面図・断面図	79~80
第67図	23-OB平面図・断面図	81~82
第68図	24-OS出土遺物実測図	83
第69図	25-OO平面図・立面図	83
第70図	25-OO出土遺物実測図	83
第71図	26-OB平面図・断面図	84
第72図	27-OW平面図・立面図	85
第73図	27-OW出土遺物実測図	86
第74図	28-OG検出状況平面図・断面図	87
第75図	28-OG遺物出土状況平面図・立面図	88
第76図	28-OG棺材実測図	89
第77図	28-OG出土遺物実測図	90
第78図	G区包含層出土遺物実測図(1)	91
第79図	G区包含層出土遺物実測図(2)	93
第80図	G区包含層出土遺物実測図(3)	94
第81図	29・30・31・32-OB配置図	95
第82図	G区建物柱間模式図	96
第83図	29-OB平面図・断面図	97
第84図	30-OB平面図・断面図	98
第85図	31-OB平面図・断面図	99
第86図	32-OB平面図・断面図	100
第87図	36-OB平面図・断面図	102
第88図	37-OB平面図・断面図	103

第89図	38-O B 平面図・断面図	104
第90図	39-O B 平面図・断面図	105
第91図	45-O W 平面図・立面図	106
第92図	45-O W 出土遺物実測図 (1)	107
第93図	45-O W 出土遺物実測図 (2)	108
第94図	45-O W 出土遺物実測図 (3)	109
第95図	45-O W 出土遺物実測図 (4)	110
第96図	45-O W 出土遺物実測図 (5)	111
第97図	E~G 区石器類分布図・地形断面図	113~114
第98図	石器類組成図	117
第99図	石川谷縄文前期遺跡分布図	119

表 目 次

第1表	遺構番号新旧対照表	5
第2表	A~E 区石器類数量表	28
第3表	F 区 I 層石器類集計表 (1)	53
第4表	F 区 I 層石器類集計表 (2)	54
第5表	F 区 I 層石器類集計表 (3)	55
第6表	F 区石器類出土点数補正表	56
第7表	遺物観察表	122~129
第8表	A~E 区ナイフ形石器・石錐・尖頭器計測表	130
第9表	F 区石錐・異形石器・二次加工剥片計測表	130
第10表	楔形石器計測表	130
第11表	A~E・G 区石鏃計測表	130
第12表	F 区 II・III 層石鏃計測表	130
第13表	F 区 I 層石鏃計測表 (1)	131
第14表	F 区 I 層石鏃計測表 (2)	132
第15表	刃器観察表	133

卷頭図版目次

- 卷頭図版一 高向遺跡全景
- 卷頭図版二 F・G区全景
- 卷頭図版三 28-OG
- 卷頭図版四 27-OW、28-OG出土遺物

図版目次

- 図版一 A区全景・遺構
- 図版二 B区全景・遺構
- 図版三 C区全景・遺構
- 図版四 C区遺構
- 図版五 D区遺構
- 図版六 E区遺構
- 図版七 F区遺構 (13・14-OB、16-OB)
- 図版八 F区遺構 (航空写真)
- 図版九 F区遺構 (平安時代建物跡群、18-OB)
- 図版一〇 F区遺構 (22・23-OB、25-OO)
- 図版一一 F区遺構 (27-OW)
- 図版一二 F区遺構 (28-OG)
- 図版一三 F区遺構 (28-OG)
- 図版一四 G区全景・遺構 (全景、奈良時代建物跡群)
- 図版一五 G区遺構 (航空写真)
- 図版一六 G区遺構 (航空写真)
- 図版一七 G区遺構 (36・37-OB、38・39-OB)
- 図版一八 G区遺構 (45-OW)
- 図版一九 包含層出土遺物 (ナイフ形石器、縄文土器)
- 図版二〇 包含層出土遺物 (須恵器、土師器、土師質土器)

- 図版二一 包含層出土遺物（須恵質土器、瓦質土器）
- 図版二二 包含層出土遺物（陶磁器、その他）
- 図版二三 包含層出土遺物（土器、瓦、鉄器、木器）
- 図版二四 包含層出土遺物（銭貨、道標、鉄器）
- 図版二五 包含層・遺構出土遺物（石鏃、石鏃未製品、石錐、石核）
- 図版二六 包含層出土遺物（尖頭器）
- 図版二七 包含層出土遺物（刃器）
- 図版二八 包含層出土遺物（刃器）
- 図版二九 包含層出土遺物（刃器）
- 図版三〇 包含層出土遺物（石鏃）
- 図版三一 包含層出土遺物（石鏃）
- 図版三二 包含層出土遺物（石鏃）
- 図版三三 包含層出土遺物（石鏃）
- 図版三四 包含層出土遺物（石鏃）
- 図版三五 包含層出土遺物（石鏃、異形石器、二次加工のある剥片）
- 図版三六 包含層出土遺物（石錐、石鏃未製品、楔形石器）
- 図版三七 包含層出土遺物（石鏃、石鏃未製品、石錐）
- 図版三八 包含層出土遺物（刃器）
- 図版三九 包含層出土遺物（楔形石器）
- 図版四〇 包含層出土遺物（石核）
- 図版四一 包含層出土遺物（石鏃、刃器）
- 図版四二 遺構出土遺物（弥生・奈良時代）
- 図版四三 遺構出土遺物（平安時代）
- 図版四四 遺構出土遺物（平安時代）
- 図版四五 遺構出土遺物（鎌倉時代）
- 図版四六 遺構出土遺物（鎌倉時代）
- 図版四七 遺構出土遺物（鎌倉時代）
- 図版四八 遺構出土遺物（鎌倉時代）
- 図版四九 遺構出土遺物（鎌倉時代）

第 I 章 調査の経過と方法

第 1 節 調査の経過

高向遺跡は、1973年度財団法人大阪文化財センターが実施した主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（大阪外環状線）内の埋蔵文化財分布調査によって発見された遺跡である。1986年度国道170号線（大阪外環状線）の建設に先立ち、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が道路予定地内に、遺跡範囲、遺構、遺物包含層の確認を目的とした試掘調査を実施した。全長約1.1kmの予定地内に32ヵ所のトレンチを設定、調査したところ、遺構および良好な遺物包含層を確認した。大阪府教育委員会は上述の予定地内について、道路建設に先立って全面発掘調査が必要であるとの判断を下し、その旨大阪府土木部へ通知するとともに、発掘調査の取り扱いについて府土木部と協議に入った。協議の結果、大阪府教育委員会の指導のもと、1987年度以降財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、3次に分けて発掘調査を担当することとなった。1987年度は1次調査（B・C区）、2次調査（A・E区およびD区の一部）を、1988年度は3次調査（D区の一部およびF・G区）を実施した（第1図）。全調査対象面積は、約23000m²である。

第 2 節 調査・整理の方法

1. 調査の方法

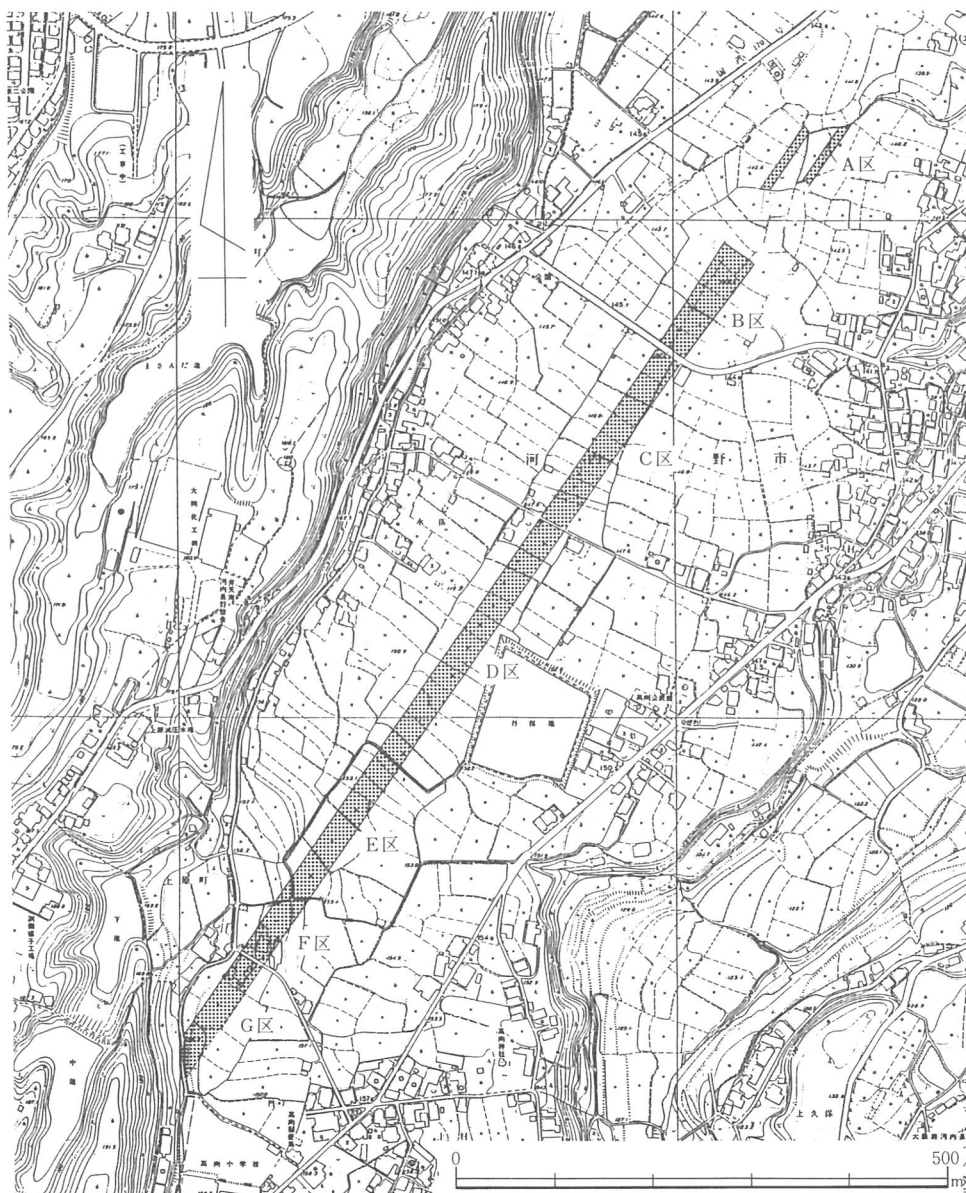
当協会では、調査方法等を定めた「発掘調査規程」に基づき、調査区の地区割り方法を以下のように定めている（第2・3図）。

- 1 国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系を使用して遺跡の位置を表示する。
- 2 区画の基本は、2500分の1地形図である。
- 3 この地形図を12等分して500m×500mの区画を作る。この区画にA～Lまで記号を付ける。
- 4 次に500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画を作る。この区画は01から25までの2桁の数字で示す。
- 5 次に100m×100mの区画を4m×4mに分割する。この区画は2文字のアルファベッ

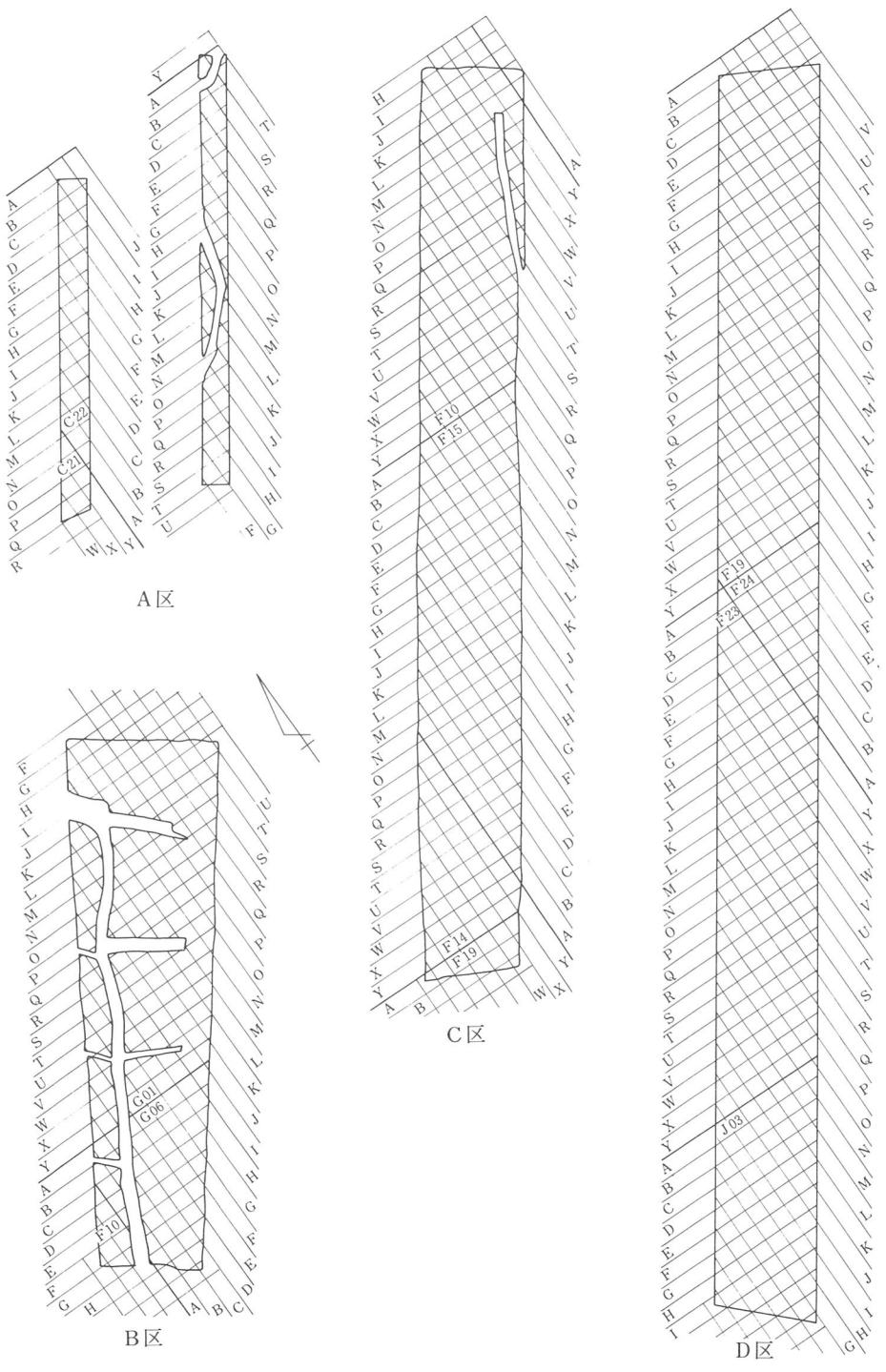
トで示す。表現方法は、行、列の順に記す。

このようにして設定された各地区の四隅は、X・Y座標で示され、遺物取り上げの最小単位となる。

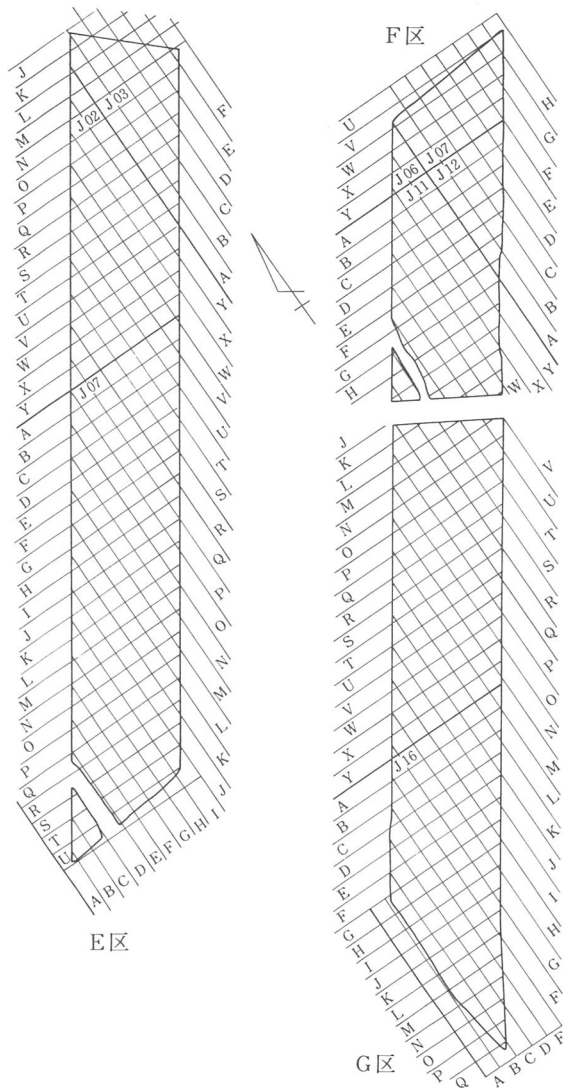
現地調査では上記の地区割り方法のほかに、調査地を横断する里道等によって独自に7つの調査区を設定した。これを北から順にA～G区と称する。



第1図 調査区位置図



第2図 地区割り模式図(1)



第3図 地区割り模式図(2)

2. 整理の方法

のべ3ヵ年の調査では、瓦器類、須恵器類や石器類を中心にさまざまな遺物が出土した。これらの遺物については独自の遺物台帳を作成し、遺物の分類と計数を行い、包含層出土遺物と遺構との関係を検討した。特に石器類については、まず①石鏃、②スクレイパー、③石錐、④石核、⑤フレイク、⑥チップ、⑦その他、の7項目に分類した台帳を作成し、

さて調査では、第I層(耕作土層)はF区を除く調査区で機械掘削を実施したが、第II・III層は良好な遺物包含層であったため、人力による掘削を行った。一方F区第I層には、分布調査ならびに試掘調査で大量にサヌカイトが含まれていることが判明していたので、全体の60%の耕作土を回収、水洗し、遺物収集に努めた。また、遺構はすべて第IV層(地山)上面で検出した。

さて「規程」では、検出した遺構は大小にかかわらず、発見順に1番からとおし番号を付けることが定められている。のべ3ヵ年にわたる高向遺跡の調査では、多数の遺構を検出したため、本文中の記載に必要と考えられる遺構を整理し、以下に示すような遺構番号の新旧対照表を作成した。以下の記載では新番号を用いる(第1表)。

この台帳に基づいて各々の分布状況を検討した。また石鏃については個々の部位を計測し、形態分類の指標となるべきデータの収集に努めた。なお石器類に関しては、第Ⅲ・Ⅳ章で詳しく触れる。

第1表 遺構番号新旧対照表

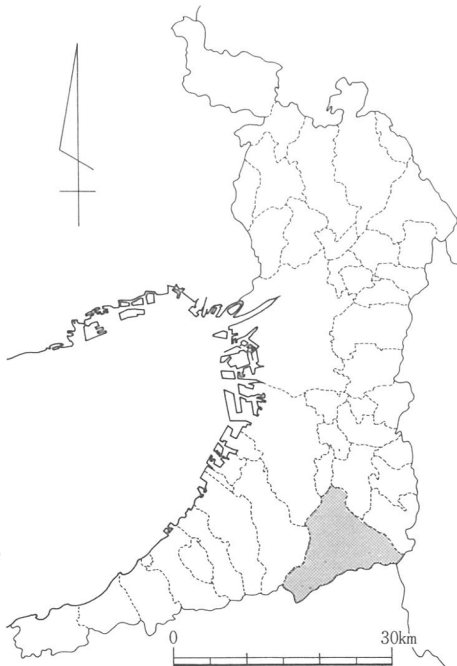
	旧 番 号	新 番 号		旧 番 号	新 番 号
B }	1 8 6-00	1-00	F 区	1 3 0 9-OP	23-OB 柱穴口3
	2 2 7-00	2-00		1 4 5 3-OP	23-OB 柱穴口4
	6 5 6-00	3-00		1 3 6 8-OS	2 4-OS
	4 1 5-0X	4-0X		1 4 7 9-00	2 5-00
	2 9 0-0X	5-0X		1 2 2 1-OB	2 6-OB
	5 9 2-OS	6-OS		1 2 9 7-OP	26-OB 柱穴ハ4
	6 4 3-OS	7-OS		1 3 6 9-OW	2 7-OW
	7 7 2-0X	8-0X		1 4 7 5-OG	2 8-OG
	8 1 0-0X	9-0X		1 1 3 3-OB	2 9-OB
	9 1-00	1 0-00		1 1 3 2-OB	3 0-OB
E 区	9 2-00	1 1-00	1 1 7 7-OB	3 1-OB	
	6 7 5-OB	1 2-OB	1 1 5 8-OB	3 2-OB	
	1 4 0 0-OB	1 3-OB	1 1 5 5-OS	3 3-OS	
	1 4 0 7-OP	1 4-OP	1 1 6 3-OS	3 4-OS	
	1 3 9 6-OB	1 5-OB	1 1 7 4-OS	3 5-OS	
	1 2 0 1-OB	1 6-OB	1 0 2 8-OB	3 6-OB	
	1 2 0 1-OP	16-OB 柱穴イ4	1 0 2 9-OB	3 7-OB	
	1 3 6 3-OS	1 7-OS	9 8 8-OB	3 8-OB	
	1 3 4 3-OB	1 8-OB	9 7 7-OB	3 9-OB	
	1 4 6 2-OP	1 9-OP	9 9 0-00	4 0-00	
F 区	1 4 8 7-OP	2 0-OP	G 区	1 1 8 8-OS	4 1-OS
	1 3 3 6-OP	2 1-OP		1 4 8 8-OS	4 2-OS
	1 2 8 4-OB	2 2-OB		9 9 5-00	4 3-00
	1 3 1 2-OP	22-OB 柱穴口2		9 8 5-OS	4 4-OS
	1 2 9 6-OB	2 3-OB		9 8 0-OW	4 5-OW
	1 3 0 2-OP	23-OB 柱穴ニ1			4 6-0X
	1 3 0 7-OP	23-OB 柱穴ニ3			

第II章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

高向遺跡の所在する河内長野市は大阪府南東部に位置しており、南端部は和歌山県と境を接している（第4図）。南部は和泉山脈、東部は金剛山脈に挟まれ、山間丘陵地帯が市域の大きな面積を占めている。市内の和泉山脈に源を発する石川は、金剛山地の西麓を北流して天見川、佐備川、千早川等の支流を合わせ、やがて大和川左岸に合流する大阪府南部の主流である。石川流域では2段から3段の河岸段丘が北に向けてよく発達しており、高向遺跡の周辺でも良好な状態で残されている。

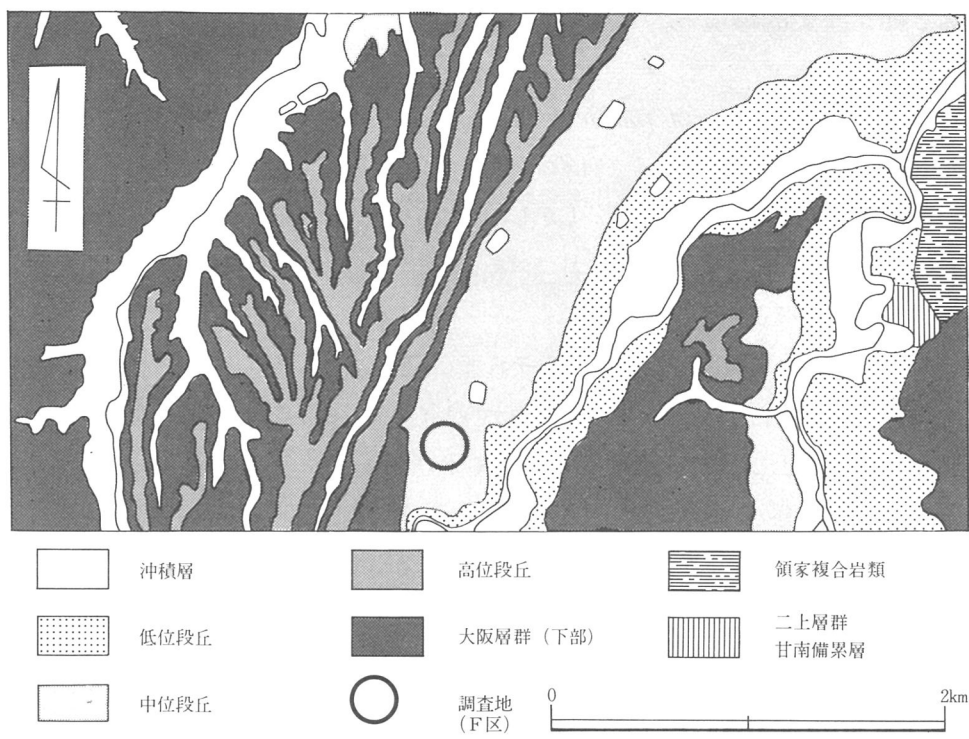
高向遺跡は河内長野市高向に所在し、石川上流左岸の中位段丘面上に立地している（第5図）⁽¹⁾。石川の上流部は西条川とも呼称されており、富田林市に向けて北東流する。ここでは中・低位段丘は石川左岸において発達しているが、高向地区は石川左岸の中位段丘面の最上流部にあたる。遺跡の立地している中位段丘面は標高140～155m、表層部分は平坦



第4図 河内長野市位置図

に近いが、南西から北東にかけて徐々に高度を下げている。遺跡地の南東約150～300mで中位段丘は比高差約10mの段丘崖を介して低位段丘に至る。石川河床面との比高差は約30～35mである（第6図）。かつて高向地区ではこれらの段丘面について、中位を「上の台」、低位を「下台」と呼称していたようである⁽²⁾。低位面は石川右岸にも帯状に形成されている。遺跡の西側には高位段丘面が存在し、中位面との比高差は約20mである。これには北東方向へ向かう多数の開析谷が刻まれ、山頂部に段丘面の名残をとどめる。開析谷の斜面には下部大阪層群が露出している。

高向地区には条里地割が良好に保存されている。地割自体は小規模ながら、市内では最



第5図 調査地付近地質図

も明瞭に遺存しており、また大阪平野の条里地割の中で最高位に位置している⁽³⁾。石川流域の条里は正方位であるのに対し、高向地区では $N-34^{\circ}-E$ を示しており、地形に即して設定されていることが指摘されている⁽⁴⁾。



第6図 調査地付近の石川谷横断形

第2節 歴史的環境

河内長野市内には111ヶ所の遺跡が周知されているが、大半はその実体把握までには至っていない。石川左岸に位置する高向遺跡周辺も、現在に至るまで顕著な調査例がなく、歴史的背景は極めて不明瞭であった。しかし、近年石川右岸段丘上に位置する三日市遺跡の調査等で、その内容が徐々に解明されつつある⁽⁵⁾。ここでは、三日市遺跡の調査成果を中心に市内の遺跡を概観する（第7図）。

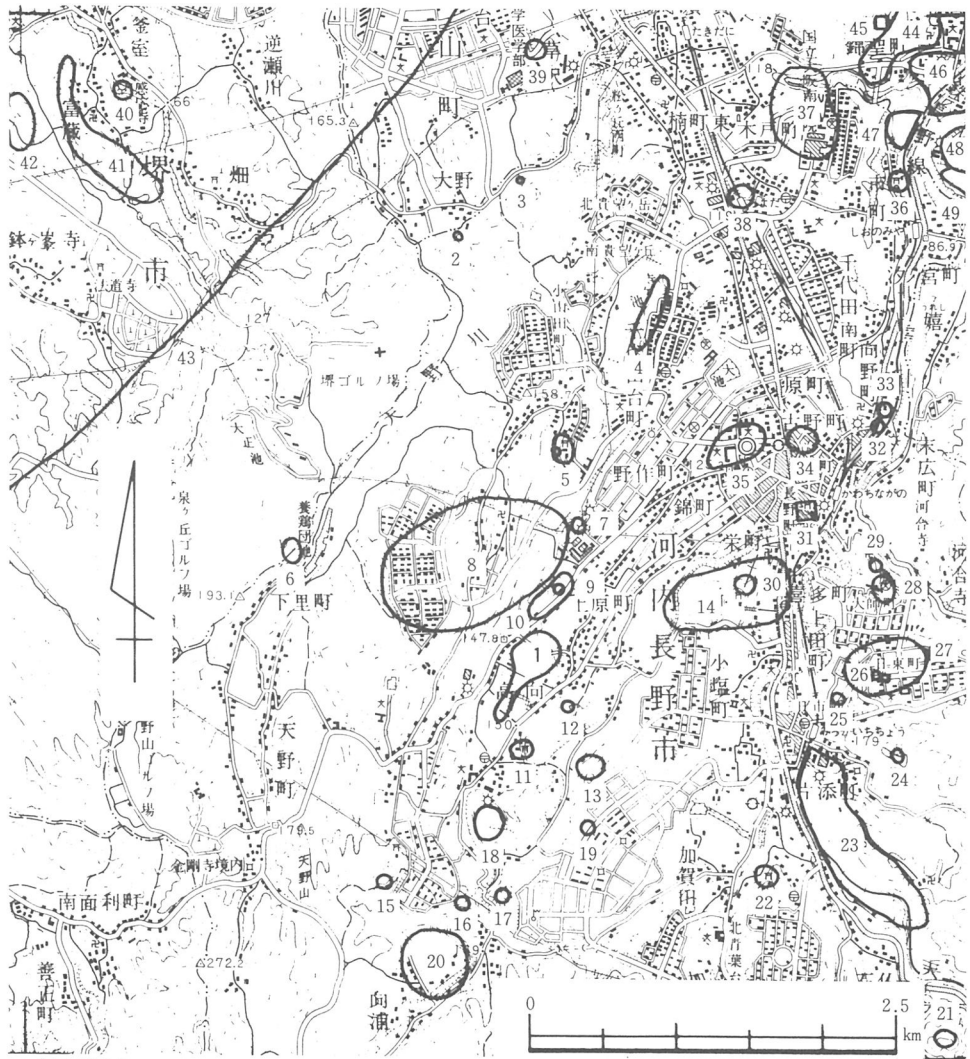
まず三日市遺跡の調査成果としては、それまで不明確であった旧石器・縄文時代の生活痕が発見されたことである。遺物包含層中からナイフ形石器2点および縄文時代早期の押型文土器片が出土し、縄文時代中期から後期にかけての土壌3基が検出された。この土壌のうち1基は、墓の可能性が強いとされている。一方、高向遺跡北側一帯の上原地区の分布調査では、サヌカイト片の散布が確認されている⁽⁶⁾。

弥生時代の遺構は、中期と考えられる竪穴住居跡2棟と後期の溝3条が検出された。かつての調査で弥生時代後期の高地性集落と判明した大師山遺跡が、三日市遺跡の北側丘陵上に位置することから、両者の間に有機的な関係があったことがうかがわれる⁽⁷⁾。

この大師山遺跡内に古墳時代前期の前方後円墳、大師山古墳が築造される。過去の調査で、粘土郭内から石製腕飾り類や内行花文鏡等が出土した。この大師山古墳が築造された頃、三日市遺跡では竪穴住居跡と土壌墓が相次いで営まれる。また、中・後期の建物群や古墳等が集中的に検出されたが、特に中期の遺構には韓式系土器が伴う。横穴式石室墳は市内各地に点在するが、高向遺跡の北西に位置する塚穴古墳もその1つである。この古墳は、江戸時代にいったん石室が破壊され、その後再構築されたものである。

ところで市内の奈良・平安時代遺跡は、現在のところほとんど確認されていない。わずかに小山田古墓では2基の火葬墓が、また尾崎遺跡では平安時代の掘立柱建物跡が検出され、高向南遺跡では12世紀前半の瓦器碗が出土したにすぎない⁽⁹⁾。しかしそれらとは対照的に、文献資料では「高向」が歴史の表舞台に登場する時期でもある。つまり883年（元慶7年）観心寺勸録縁起資材帳にはじめて「高向」の名が、また平安時代末期には、安楽寿院領の荘園として「高向庄」が初見するのである⁽¹⁰⁾。

鎌倉時代以降、三日市遺跡では多量の土器類が掘立柱建物跡や溝、土壌、井戸等とともにみつき、石仏遺跡からもほぼ同時期の建物跡等が検出されている⁽¹¹⁾。また高向遺跡東側、低位段丘面上には惣持寺（総持寺）跡がある。この寺跡は1386年（至徳3年）に書かれた



河内長野市

- | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 高向遺跡 | 2. 小山田1号古墓 | 3. 小山田2号古墓 | 4. 寺ヶ池遺跡 |
| 5. 住吉神社遺跡 | 6. 青ヶ原神社遺跡 | 7. 「仲哀廟」 | 8. 長池窯跡群 |
| 9. 塚本古墳 | 10. 上原遺跡 | 11. 高向神社遺跡 | 12. 惣持寺跡 |
| 13. 宮山古墳 | 14. 烏帽子形城跡 | 15. 仁王山城跡 | 16. 日ノ谷城跡 |
| 17. 峯山城跡 | 18. 高木遺跡 | 19. 宮山古墳 | 20. 日根観音寺遺跡 |
| 21. 石仏遺跡 | 22. 加賀田神社遺跡 | 23. 三日市遺跡 | 24. 経塚 |
| 25. 大師山南古墳 | 26. 大師山古墳 | 27. 大師山遺跡 | 28. 河合城跡 |
| 29. 未広窯跡 | 30. 烏帽子形山古墳 | 31. 長野神社遺跡 | 32. 古野古墳 |
| 33. 五木古墳 | 34. 膳所藩陣屋跡 | 35. 本田藩陣屋跡 | 36. 千代田神社遺跡 |
| 37. 塩谷遺跡 | 38. 菱子尻遺跡 | | |

大阪狭山市

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 39. 茶葉木遺跡 | 40. 富蔵東遺跡 | 41. 倉谷・富蔵遺跡 | 42. 泉田中遺跡 |
| 43. 陶邑窯跡群 | | | |

富田林市

- | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|
| 44. 錦聖遺跡 | 45. 堂ノ山古墳 | 46. 錦織南遺跡 | 47. 市村北遺跡 |
| 48. 西野々古墳群 | 49. 外子古墳 | | |

第7図 周辺遺跡分布図

日野観音寺蔵大般若経卷28奥書に、「高向庄惣持寺」とみえる寺院で、鎌倉時代の鎮壇具も出土している。⁰² 現在はわずかに「惣持寺池」という池が、かつての名残をとどめているにすぎない。一方、天野山金剛寺では室町時代の墓地が発見されている。⁰³

さて市内にはこれらの集落・寺院遺跡のほか、中世城郭が30ヶ所余り確認されている。⁰⁴ 高向遺跡付近では、石川右岸烏帽子形山山頂に烏帽子形城がある。この城は、1332年（元弘2年）赤坂城の出城として楠正成によって築城されたもので、その後高向氏が拠ったとされる。1524年（大永4年）には河内守護畠山氏一族の抗争で、畠山植長が居を構えた。信長畿内進攻の際には、キリシタン大名橋長治が入城している。

近世以降「高向村」周辺は、旗本三好氏、甲斐庄氏領下で、天野街道や高野街道等の交通の要衝として栄え、現在に至る。

なお「高向」は以前「タコウガ」「タクガ」等と呼称されていたが、最近になって「タコウ」と称されるようになった。

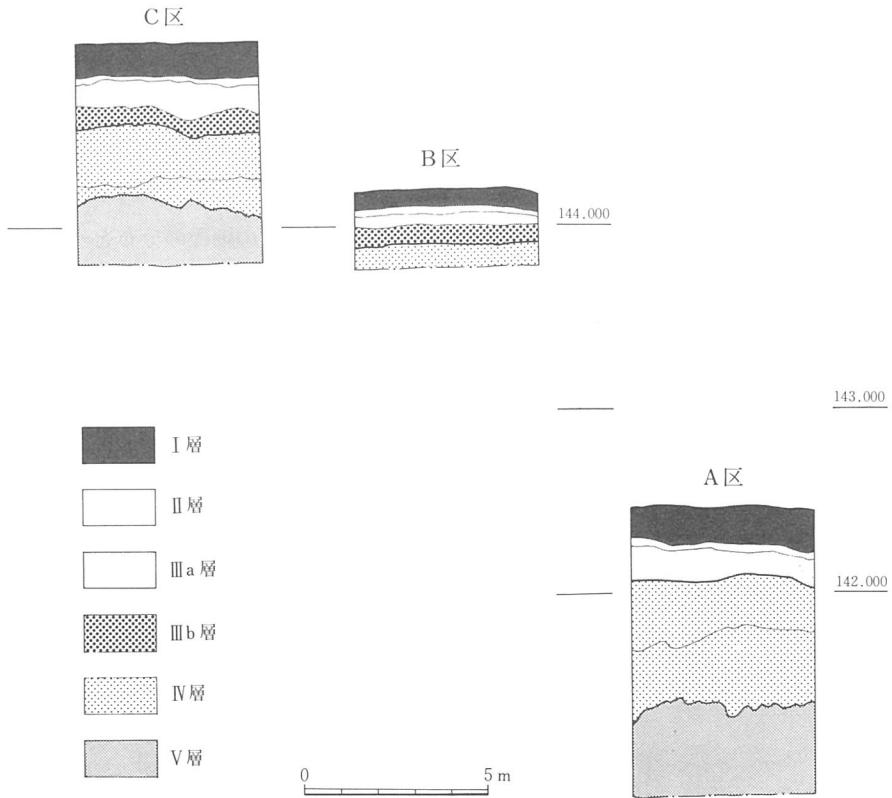
註

- (1) 第5図の作成にあたり、『富田林市史』第1巻 付図 富田林市 昭和60年 を一部改変した。
- (2) 三浦玄良『高向村郷土史の研究』 1948
- (3) 服部昌之「大阪平野の条里制—石川河岸段丘と河内低地—」『人文研究』第35巻 第10分冊 大阪市立大学文学部 1983
- (4) 加藤博章、尾谷雅彦、亀山隆「Ⅳ. 条里制について」『上原遺跡試掘調査報告書』 河内長野市教育委員会 1986
- (5) 『三門市遺跡発掘調査報告書』Ⅰ 三門市遺跡調査会 1988
- (6) 『河内長野市上原地区区画整理事業予定地内分布調査報告書』 (財)大阪文化財センター 1985
- (7) 『河内長野市 大師山』 関西大学文学部考古学研究第5冊 関西大学 昭和52年
- (8) (7)と同じ
- (9) 『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 河内長野市文化財調査報告書第14輯 河内長野市教育委員会 1988
- (10) 『住吉大社司解』（天平3年）があるが、年代の信憑性には疑問がもたれている。
- (11) 『石仏遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1982
- (12) 中村善文「河内長野市高向出土の石製容器—輪宝・楡などを収めた特異な1例—」『古代研究』8 (財)元興寺仏教民俗調査研究所 1976
- (13) 『天野山金剛寺中世墓地発掘調査』 金剛寺坊跡調査会 1975
- (14) 以下の記載については『角川日本地名大辞典』27大阪府 角川書店 昭和58年 を参考にした。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序

調査区の大半は条里地割の内部に位置して設定され、また調査は地割とほぼ平行に行われた。総延長1100mにわたる調査地区ながらも、層序はあまり変化をみせずほぼ一定した状況を示している。特にA～F区に関しては極めて類似し、基本的には上層からⅠ・Ⅱ・Ⅲ層と呼称する地層が堆積していた。いずれも耕作に伴って形成された耕作土層および床土層である。その下層はⅣ層（地山）、Ⅴ層（段丘礫層）となっている（第8・9図）。基本的に南から北へ徐々に標高を下げる緩斜面の地形に対応するべく、表層部に形成され

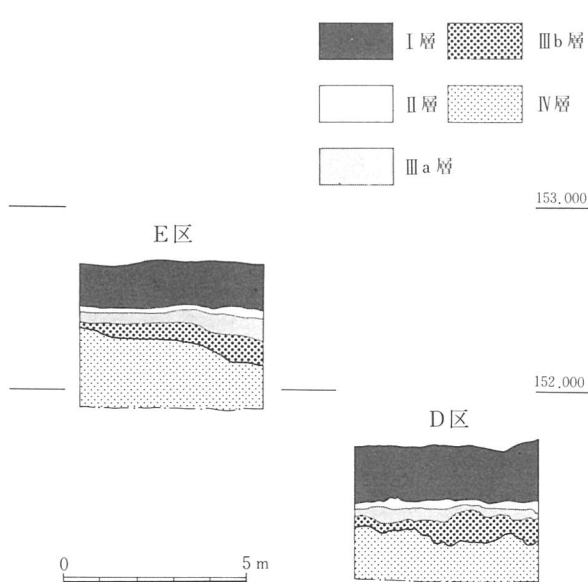


第8図 A～C区西壁土層断面図

た水田は一面ごとに段差が設けられていた。Ⅰ・Ⅱ層はそれぞれどの地点でも厚さは概ね一定し、Ⅳ層上面はほぼ平滑で北東に向かって標高を下げている。水田耕作土の段差は、つまりⅢ層部分の厚さの変化によって生じているのである。水田1枚に対し、傾斜面の上方ではⅢ層は薄く、あるいは存在せず、下方では厚みを増していた（第10図）。

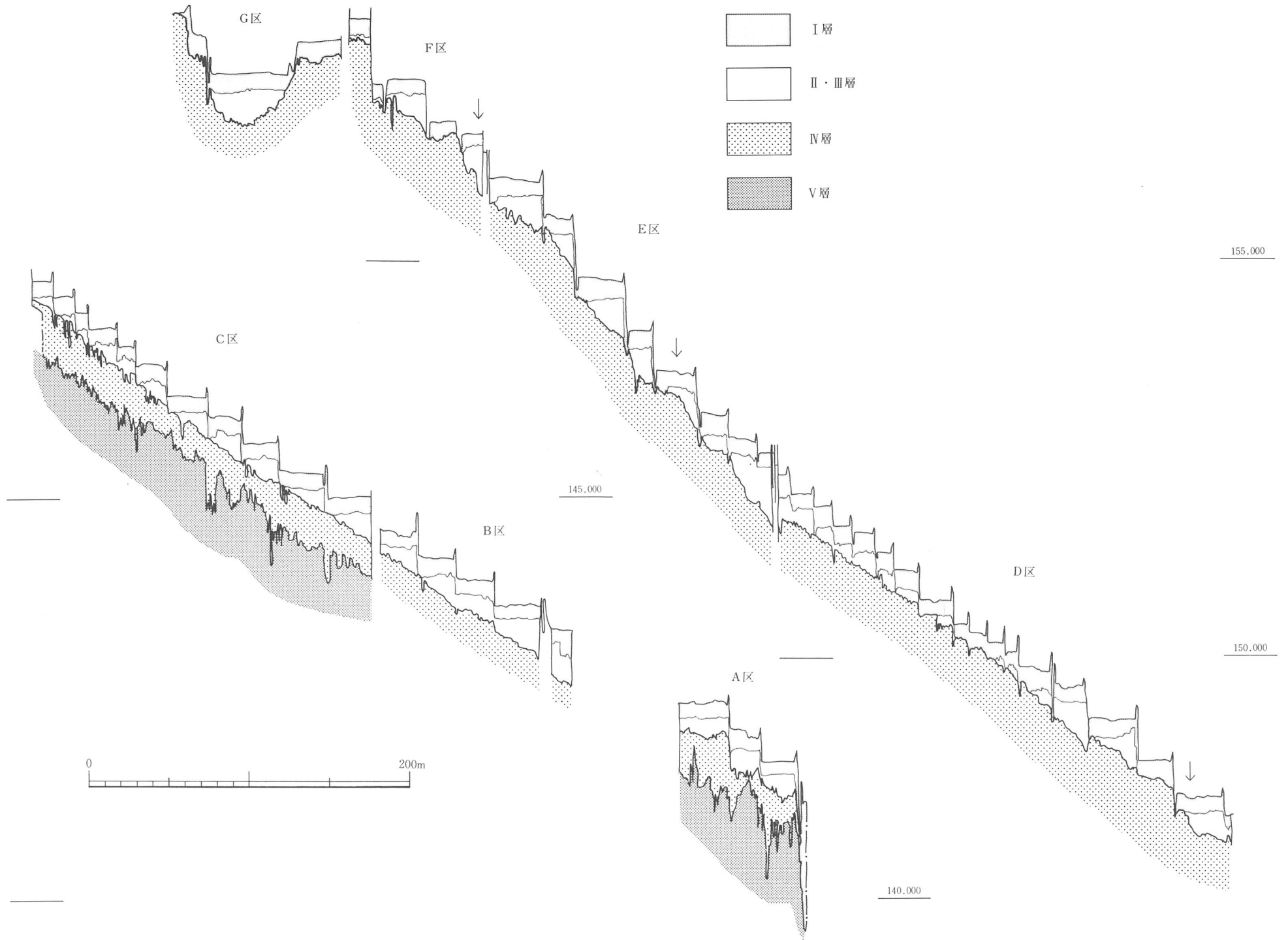
Ⅰ層は現代の耕作土である。有機質に富んだ黒褐色のシルトで、全地区を通じて18～20 cmの厚さで水平に堆積していた。縄文時代から現代の遺物を包含している。

Ⅱ層はⅠ層に伴う床土層で、酸化鉄が沈着して黄褐色を呈するシルトを主体とする。この層は水分に対して不透性が高く、水田の貯水時に水分を下層へ浸透させない役割を果たしている。厚さは5 cm前後で水平に堆積していた。人工的に床土として貼ったと確認された箇所もあるが、全体的にみると自然生成的な側面が強いと思われる。縄文時代から現代の遺物を包含している。Ⅲ層はⅠ・Ⅱ層生成以前の耕作土と考えられる。地区によって0～60 cmと厚さに変異がある。地区によっては上下に二分でき、上層をⅢ a層、下層をⅢ b層と呼称した。Ⅲ a層はオリーブ褐色、黄褐色のシルトを主体とし、Ⅲ b層は灰黄褐色、暗灰黄色の粘土質シルトを主体としている。Ⅲ層自体の厚さが薄い場合には、Ⅲ a層のみで構成されている。Ⅲ a・Ⅲ b層ともに出土遺物にほとんど時期差はみられない。旧石器時代から室町時代の遺物を包含する。Ⅲ b層下面において直径1～3 cmの円礫、亜角礫等



第9図 D・E区西壁土層断面図

の細礫の分布をみる場合があった。これを層位として認定するにはやや疑問が残るが、便宜的にⅢ c層と称した。細礫はⅣ層上面に密着した薄い堆積状況を示しており、これらの表面には上方から酸化鉄が溜まってⅣ層に固着していた。Ⅲ c層は全面的には認められず、C～E区に部分的に分布が確認された。Ⅳ層上面の形成（削平）後に堆積した層位と考えられ、Ⅲ層がかつ



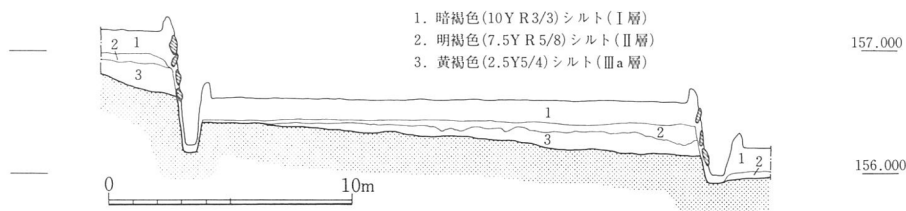
第10图 A~G区土层断面模式图

て耕作土として機能していた時期に、その当時の床土層にあたるⅣ層上面に耕作土中の細礫が沈殿したものと解される。これにも遺物が包含され、サヌカイト刃器、瓦器破片等が出土している。

Ⅳ層はいわゆる地山で、その上面において弥生時代中期から鎌倉時代の遺構が検出されている。にぶい黄褐色、灰褐色を呈したシルト質粘土、粘土質シルトを主体とし、A～C区の所見によれば50cm前後の厚みを持っていた。表土層で見られる水田区画を示す人為的な段差は、Ⅳ層にはあまり及んでいない。水田の境界に浅い溝が切られている程度である。しかし、Ⅳ層上面には現在の区画とは異なった、微弱な削り込みが観察される地点がある（第10図、矢印部分）。これは、先行する耕作地区画を示す段の痕跡である蓋然性が高い。また、検出されたⅣ層の上面は形成時点のものではなく、後の耕作化によって表面が削平されたものと思われる。Ⅲ層の一部はⅣ層に由来するのであろう。

Ⅴ層はA～C区で行った断ち割り調査で確認された層位である。極めて固く締まっており、Ⅳ層とは明らかに不整合の関係にある。拳大の礫を主体に、砂、粘土によって構成されていて、段丘堆積物の本体と考えられる。いずれも青灰色の強い還元色を呈しており、その上面はかなりの起伏をみせ、一部はⅣ層上面に礫が達している箇所もあった。

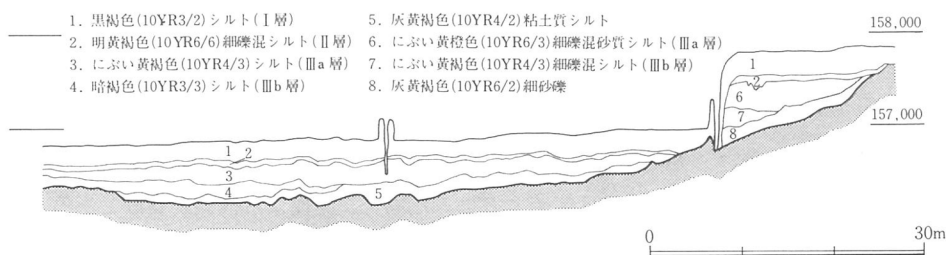
調査区のうちで、F区のⅠ～Ⅲ層には多量のサヌカイト碎片、剥片等の石器製作に伴う廃棄物および石器が包含されていた。この傾向はE区の最南端でもみられたが、分布の中心はF区にあるようだ。しかし遺物はサヌカイト類のほかに、古墳時代～室町時代の土器類が出土しているので、すべて後世の耕作による攪乱を受けているといえる。F区の断面土層図を第11図に示したが、これはX＝-173.708kmラインで東西方向に残したセクションの南面土層である。Ⅰ～Ⅲ層の堆積状態は基本的に他の地区と違いがない。全体的にみてⅢa層の残存状態は良好とはいえず、厚い所では約20cmの厚みを測るが、薄い所では削平されて存在しない。水田の1区画内では傾斜面下方の残りがよく、上方ではほとんど削られていた。Ⅲa層の残存状態は区画ごとにみた場合、東側より西側が良好である。Ⅲ



第11図 F区土層断面図

b層の分布範囲は極めて限られており、東側の標高がやや下がった箇所に狭い範囲でみられるのみであった。つまりⅢ層の大半はⅢa層によって占められている。この付近は段丘面の南端に近く、他の地区に比して強い傾斜を持っている。現在の水田面の区画は地形に沿って、いわば等高線に合わせたように設定されており、水田の幅は比較的狭くなっている。Ⅳ層の傾斜面を調整するために、水田1区画の中で標高の高い部分は、低い部分より大きな削平を受けていた。

G区は調査区の南端にあたり、最も標高の高い区域である。Ⅳ層上面のレベルをみると、A～F区はほぼ安定した傾斜を持つ緩斜面上にあたっていて、F区南端で斜面の頂点をなしてG区に至る。G区ではほぼ中央部に比較的広い面積を持つ窪地が存在し、最南端では高位段丘との境界をなす段丘崖の下端に達する。窪地は人為的な構築物ではなく、自然地形である。これを46-OXと称する。調査地東側の境界にかかった46-OXの断面図を第12図に示した。Ⅰ～Ⅲ層は他の地区と大きな変化はない。いずれも開発時期の細かい特定はできないが、類似した条件で全地区の耕地化が行われたことをうかがわせる。Ⅲb層とⅣ層との間に灰黄色粘土質シルトの層位が存在しているが、これはⅢ層の一部であろう。Ⅲ層はサヌカイトのほか古墳時代～室町時代の遺物を包含している。ここではⅣ層の形成以前の堆積環境が他の地区とは異なっていたと考えられる。Ⅳ層は表面に亀甲状の乾痕が観察され、またかつて水の溜まった状態と乾燥した状態とが、繰り返されていたことを示唆している。黄橙色、明褐色のシルトを主体とするが、窪地の中心部では還元色を呈していた。



第12図 G区(46-OX)土層断面図



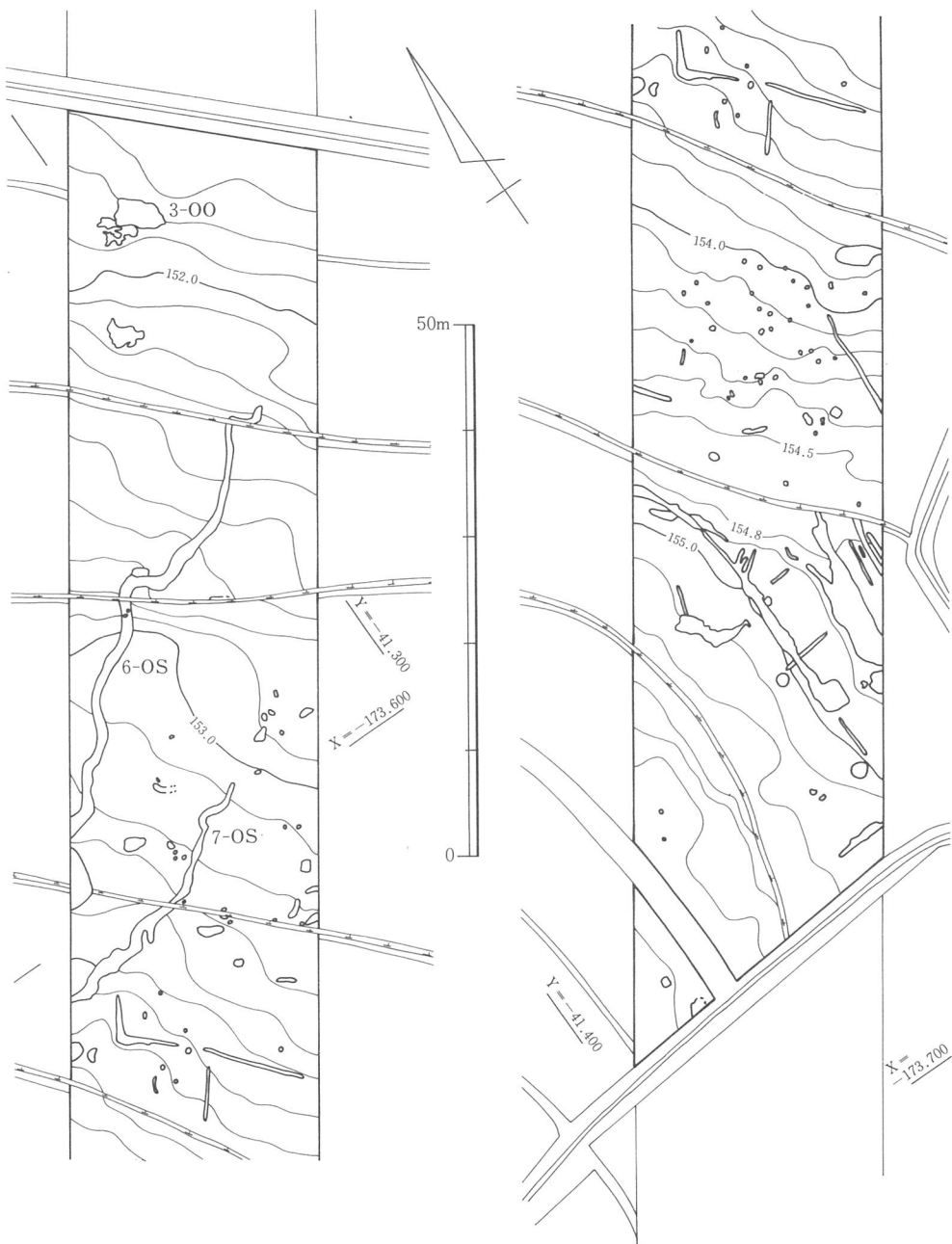
第13図 A・B区遺構配置図



第14図 C区遺構配置図



第15図 D区遺構配置図



第16図 E区遺構配置図

第2節 A～E区の調査成果

A～E区の調査の結果、検出された遺構にはピット、土壌、溝、集石遺構、掘立柱建物跡がある。これらの地区については遺構の総量が少なく、時代や性格も判別し難いものが大半を占めるため、各区の概要の後に主要なものをまとめて報告するにとどめる。

A区は調査区の最北端にあたる（第13図、図版一）。調査対象区域は道路建設予定地両側の擁壁工事部分である。遺構は少数のピット、土壌、溝が検出された。東側の調査区において用地内を流れる水路の前身と考えられる流路の痕跡が確認されている。近世遺構の遺物を主として包含している。

B区では若干量の遺構を検出した（第13図、図版二）。江戸時代の暗渠のほか、時期不明のピット、土壌、落ち込み状遺構等であるが、性格の把握できるものはほとんどない。土壌は不定形なものが多かったが、形態上から墓の可能性のある遺構が存在する。

C区では若干量の遺構を検出した（第14図、図版三・四）。弥生時代の土壌、江戸時代の暗渠、時期不明のピット、土壌、溝等である。弥生時代の遺構は、極めてまばらな分布状況を示し、数量的にも少ない。また、包含層（Ⅱ・Ⅲ層）中に弥生土器がほとんどみられないことから、当地にあった弥生時代の遺跡、たとえば集落跡が大幅に削平された結果とは考え難く、本来が散漫な遺構の分布を示していたのであろう。その他、近世以後の耕作に伴う溝や、南端部では畑の畝溝が確認されている。

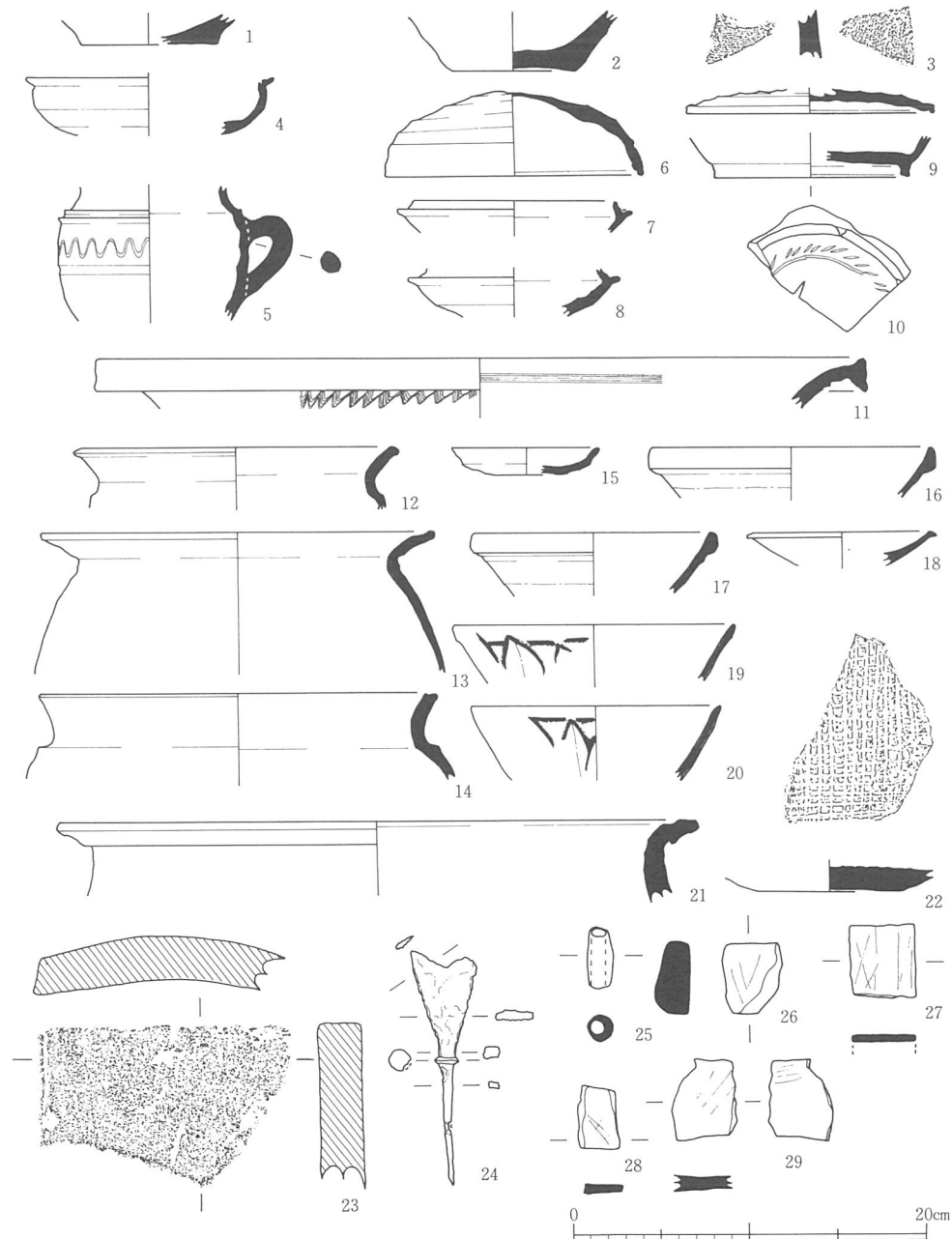
D区では若干量の遺構を検出した（第15図、図版五）。江戸時代の暗渠、時期不明の掘立柱建物跡、ピット、土壌、溝、轍等である。轍は北半部で検出されている。遺構の分布はやはり散漫で、特に南半部では遺構の分布が希薄であった。

E区では若干量の遺構を検出した（第16図、図版六）。弥生時代の土壌、時期不明のピット、土壌、溝等である。弥生時代の土壌は単独で1基存在している。北半部ではやや規模の大きい溝が2条検出されているが、その形状から自然形成の可能性はある。その他、土壌、溝のうちでは耕作に伴うものもあると考えられるが、詳細は不明である。

1. 包含層出土遺物（第17～28図、図版一九～二九・四〇）

A～E区にかけての包含層（Ⅰ層～Ⅲb層）出土遺物は、概して小破片で摩耗したものが多く、それは地理的環境でも触れたように、当該地区には条里地割が遺存し、古くから耕作地として利用されてきたことと無縁ではない。しかし遺物の種類は多岐に及び、量的

にはF・G区に比べ須恵質土器や瓦質土器が目を引く。また、石器、剥片類も一様に出土しているが、E区南端に近づくほどその量を増す。中でも石核や二次加工を加えた剥片は、E区南端に集中する傾向を示す。



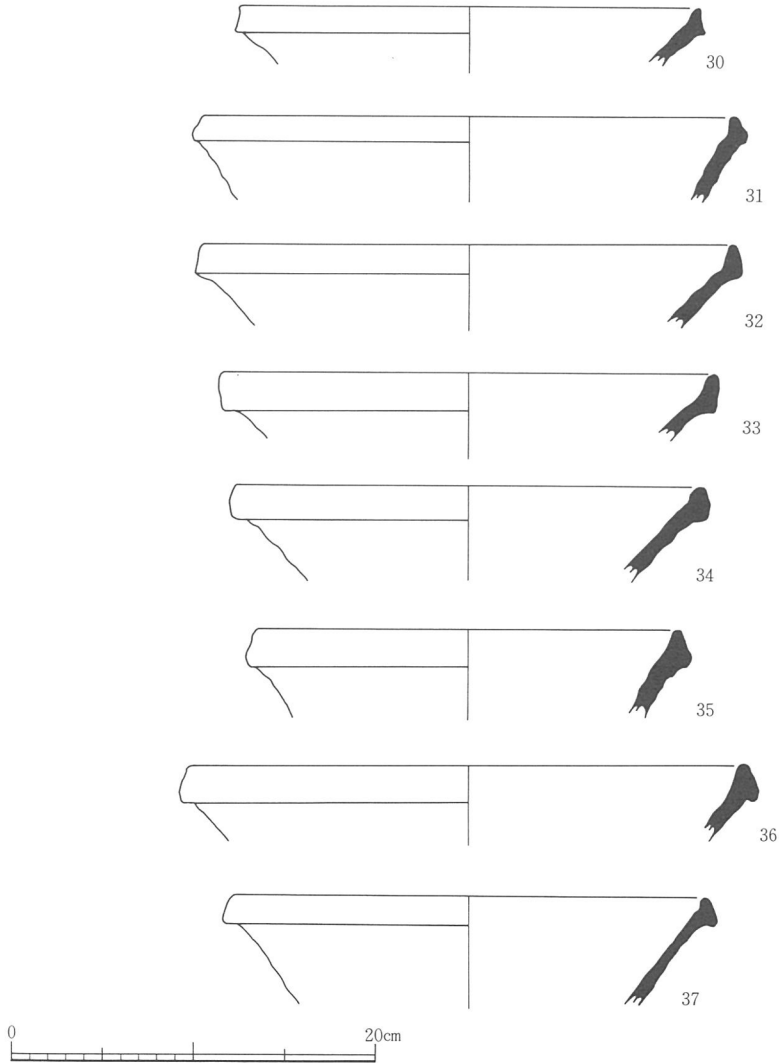
第17図 A～E区包含層出土遺物実測図(1)

1 土器

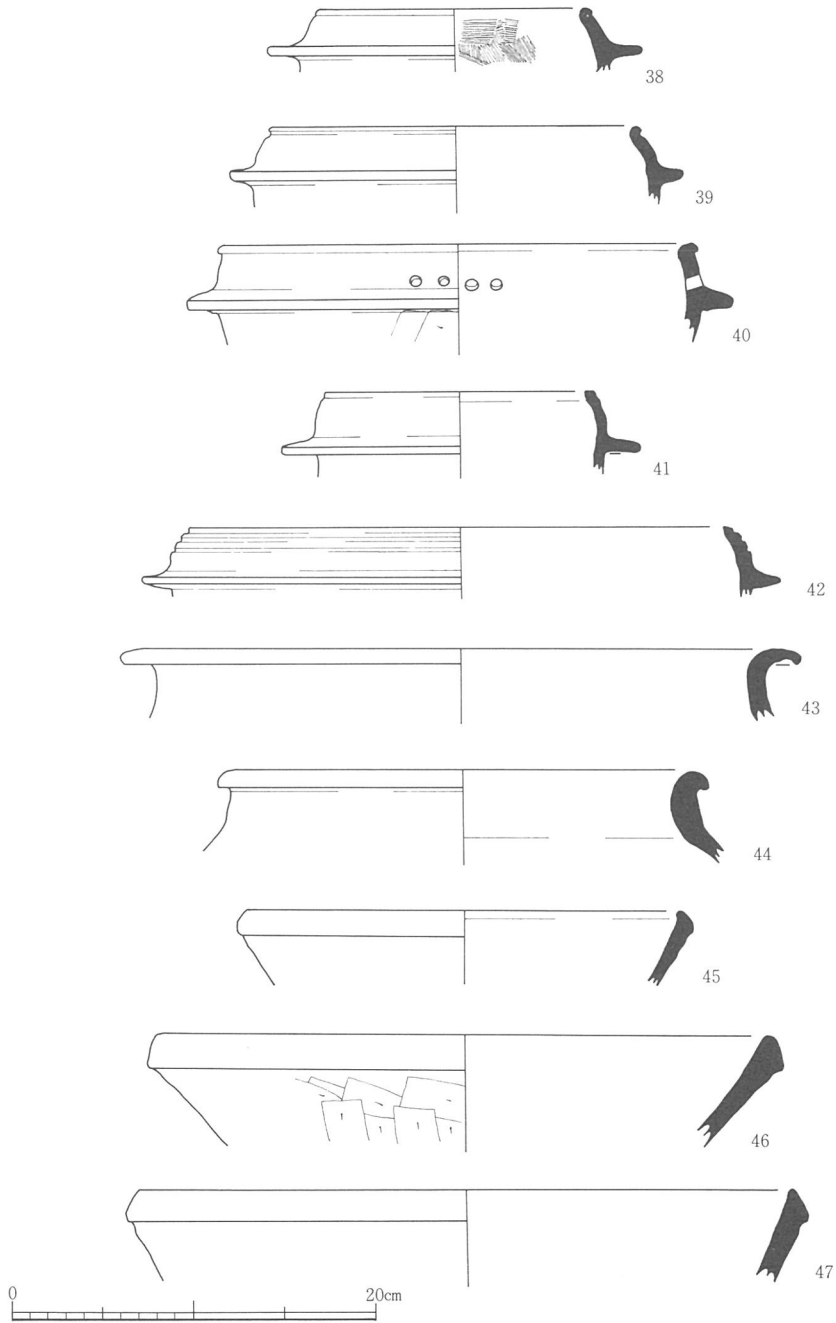
弥生土器と識別できる破片は、包含層中から若干量出土したが、図化できた資料は（1・2）のみである。ともに壺の底部破片で、摩耗が著しく、調整は不明である。

円筒埴輪片と考えられる破片（3）が1片出土したが、他に関連する資料は全く出土していない。

須恵器類は古墳時代～奈良時代にかけてのものが一様に出土したが、量的には奈良時代のものが多く、逆に飛鳥時代のものが乏しい。器種では杯身、杯蓋類が中心となる。杯身



第18図 A～E区包含層出土遺物実測図（2）



第19図 A～E区包含層出土遺物実測図（3）

（4）、碗（5）はともに5世紀代のもので、特に後者はいわゆる初期須恵器の範疇に入るものであろう。また（6～8）は6世紀代の、（9・10）は8世紀代の杯身、杯蓋であ

る。この中で(9)は、内面に墨が付着していることから、転用硯と考えられる。また(10)の外底部には爪状の圧痕が観察できる。(11)は甕口縁部破片である。

土師器甕(12~14)は、いずれも器壁が著しく摩耗しているため、調整は不明である。

瓦器類は出土した破片数では最も多いが、いずれも小破片で、椀(342)・皿(15)類とも図化できる資料が少ない。

輸入陶磁器類では、白磁碗(16・17)、皿(18)や青磁碗(19・20)が、また国産陶磁器類では常滑甕(21)、瀬戸おろし皿(22)等が出土している。

須恵質鉢(30~37)は、いずれも内面に比較的平滑なナデ調整を施し、外面には水引き痕が残る。

瓦質土器では羽釜(38~42)、甕(43・44)、鉢(45~47)が出土した。羽釜は、通常内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整を施すが、(38)のように内面ハケ目調整を加えるものもある。

2 瓦、鉄製品、土製品、石製品

瓦は少量ではあるが調査地内から出土している。しかし平・丸瓦のみで、破片数では平瓦の方が多い。平瓦は凸面縄叩き痕、凹面布目痕のあるもの(344)と、両面離れ砂が付着するもの(23)とがある。両面離れ砂が付着するものには、凸面に叩き具の痕跡はみられない。量的には、圧倒的に後者が多い。

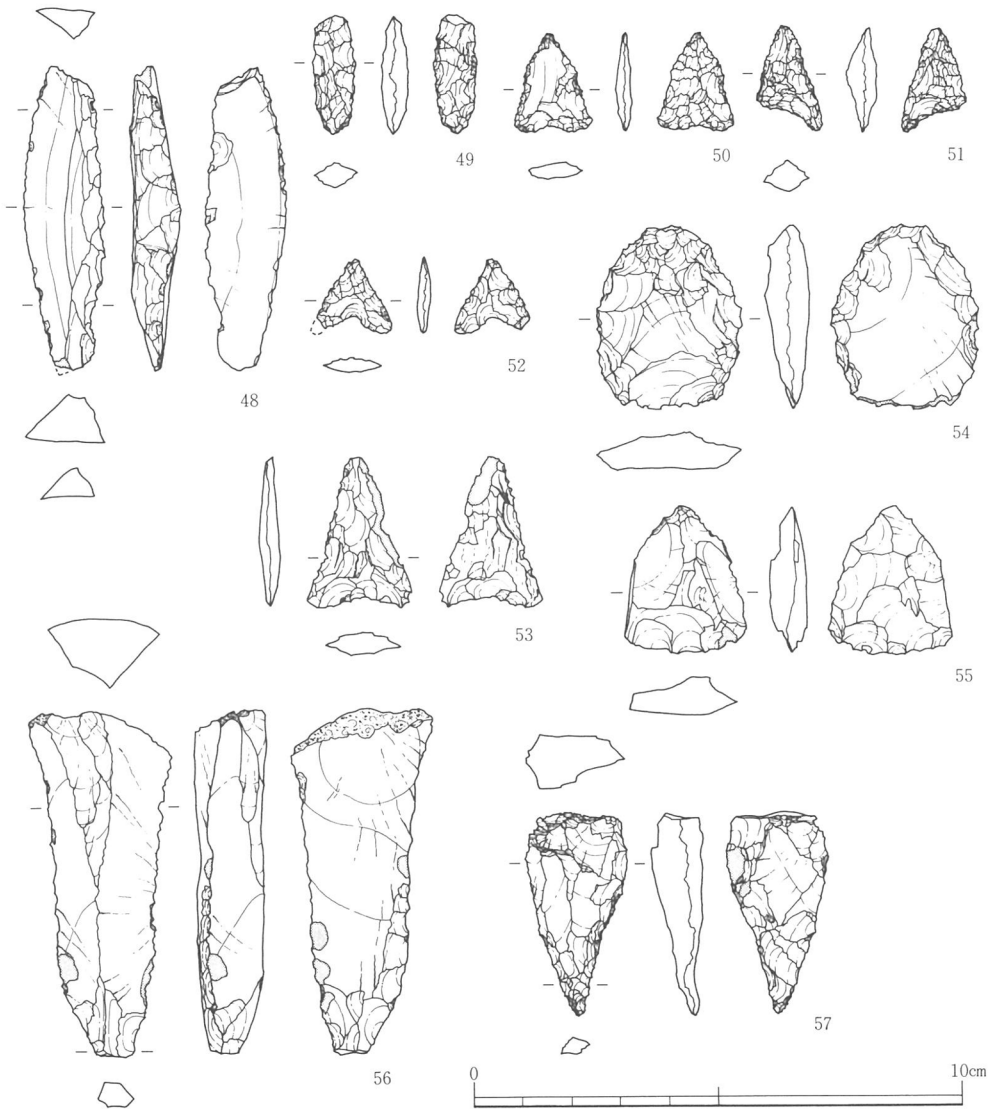
鉄鏃(24)は鯖尾鏃と呼ばれるもので、先端部片側が欠損している。また火縄銃の鉛玉(345)が1点出土している。鉛玉の重量は8.80gを測る。他に古銭類も出土したが、鏄のため文字は判読できないものが多い。

その他、土錘(25)、砥石(26~29)等が出土している。

3 石器

II・III層、遺構埋土からは、石器および石器製作の際に生じる石核、剥片、碎片等の石製廃棄物が出土している。使用石材はすべてサヌカイトで、石器にはナイフ形石器、石鏃、石錐、尖頭器、刃器がある。各地区から出土したこれら遺物の点数を第2表に示した。

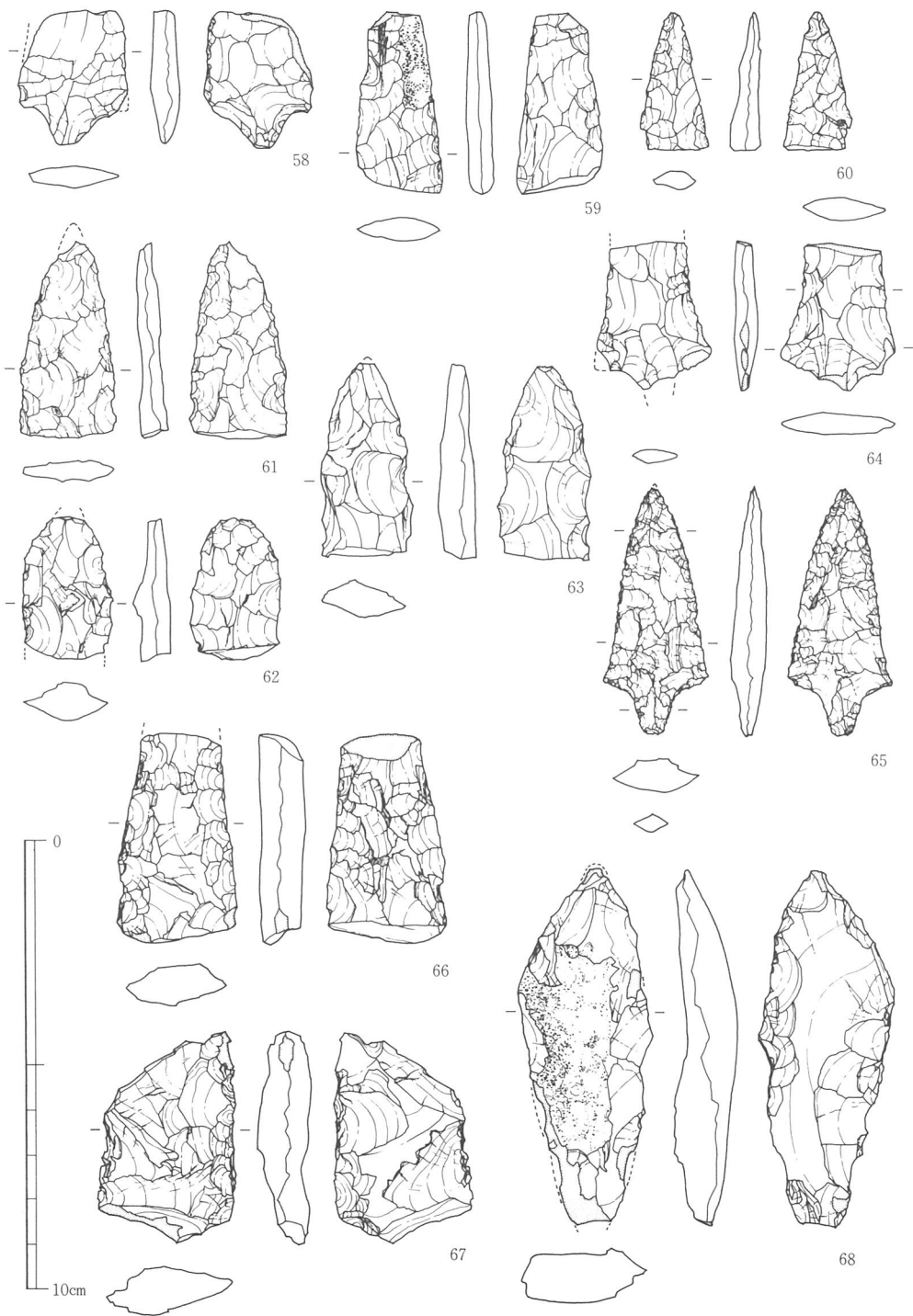
旧石器~縄文時代の遺構は皆無で、大半の石器は帰属時期について情報を欠失している。このうち旧石器時代に属するのはナイフ形石器のみである。しかし、後述するがF区の石器類の出土状況や製品の形態から推して、その大半は縄文時代の産物である蓋然性が高い。



第20図 A～E区包含層出土遺物実測図（4）

また、この中に弥生時代の石器も包含されていると考えられる。当該時期の遺構も少数ながら検出されていて、尖頭器のうちでも形態上、弥生時代に属すると思われるものがあるためである。しかし、数量的には微々たるものであろう。

遺物の分布について、地区は水路や里道によって任意に設定しているから、各々面積が異なっており単純に比較できないが、出土点数からみた見かけ上のA～E区の石器類の分布状況はE区が最も多く、以下D・B・C・A区と続く。各区の調査面積をそれぞれの出



第21图 A~E区包含層出土遺物実測図(5)

土点数で除して、製品および石製廃棄物を含めたサヌカイト類が1点出土するための絶対的面積を求めると、A区は40.7㎡、B区は31.7㎡、C区は162.2㎡、D区は30.9㎡、E区は13.2㎡となる。やはりE区が最も多いが、以下D・B・A・C区と若干の入れ替わりをみせる。E区では北と南では分布密度が異なり、特に南端約50m前後の部分は密度が高かった。これらの分布密度を上記の方法で比較すると、北側180mについては38.07㎡、南側50mについては4.06㎡となり、南端部分は他の地区と比較して極めて密度の高いことがわかる。これと比してC区では密度が極めて低くなっている。

ナイフ形石器(48)はC区で検出した。翼状剥片を素材とした典型的な国府型ナイフ形

第2表 A～E区石器類数量表

	A	B	C	D	E	合計
ナイフ形石器	0	0	1	0	0	1
石 鏃	0	1	1	4	7	13
石 錐	0	1	0	0	1	2
尖 頭 器	1	2	0	4	4	11
刃 器	1	7	6	16	5	35
石 核	2	7	1	13	33	56
剥 片	18	91	21	169	200	499
碎 片	6	3	1	18	63	91
合 計	28	112	31	224	313	708

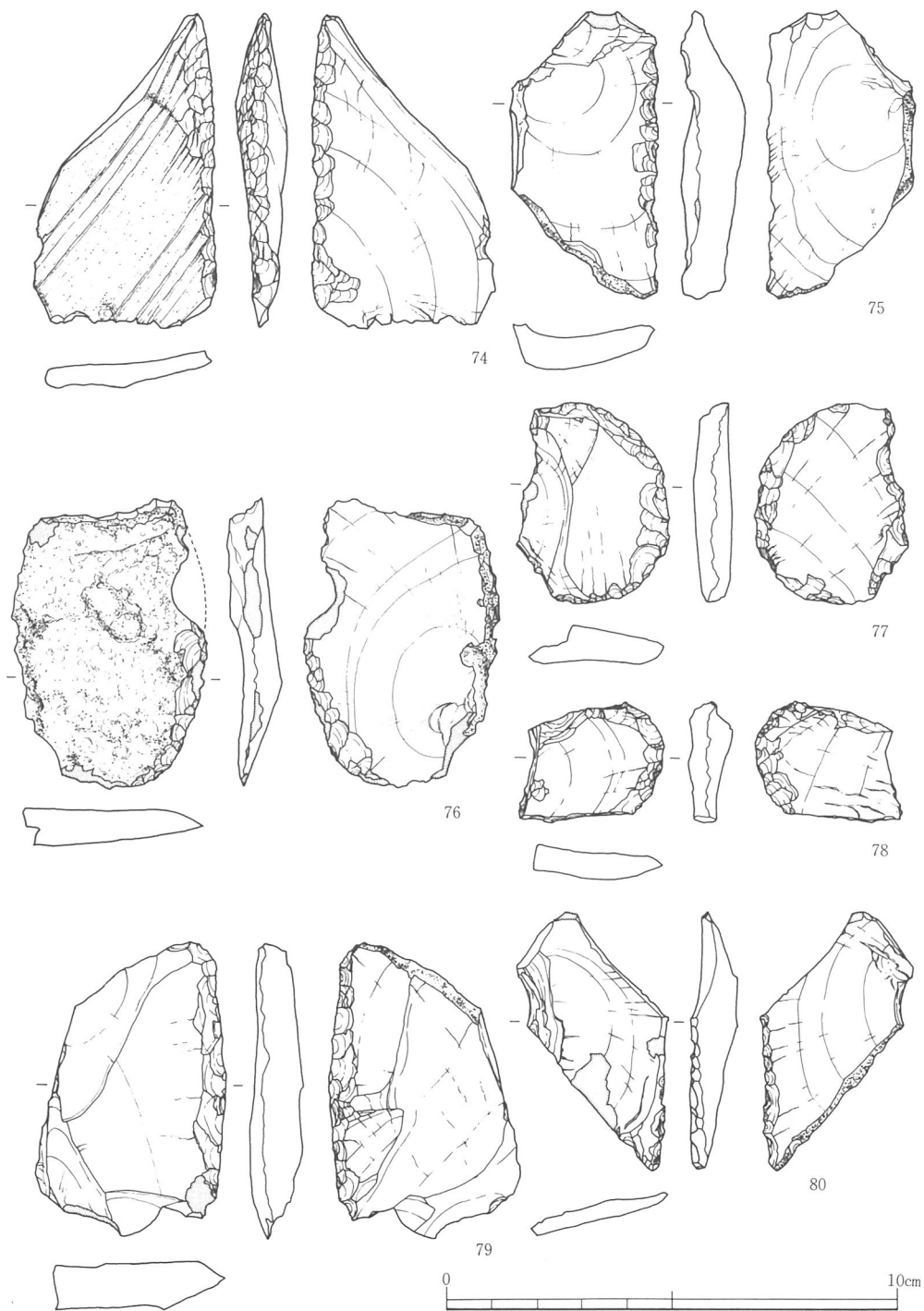
石器で、全長6.18cm、刃部幅1.48cm、厚さ0.94cmである。刃部に微細な刃こぼれが観察され、使用痕とも考えられる。色調は灰色(10Y5/1)で、あまり風化していない。

石鏃(49～55)には凹基式(50～53)、尖基式(49)、平基式(54・55)がある。総点数は13点で形態の明らかな7点を図化した。凹基式のものはいかりからみると深いものと浅いものがあり、また逆刺が片側のみにある個体がある。刃部は直線刃、あるいは刃部側縁に稜のあるものがある。尖基式のものはいち細長い形状で、一端を欠いている。ただし、残存している端部が先端か基部かは不明である。平基式のものはいち調整剥離が粗いことから、いずれも石鏃の未製品の可能性があると考えられる。(54)は形態が楕円形に近く刃器の可能性も残しているが、左右対象形で二側縁に刃部を持ち、基部も意識されていることから一応鏃の未製品としておく。(55)は粗い調整剥離が施され、二側縁に稜を作り出している。基部はやや突出気味である。

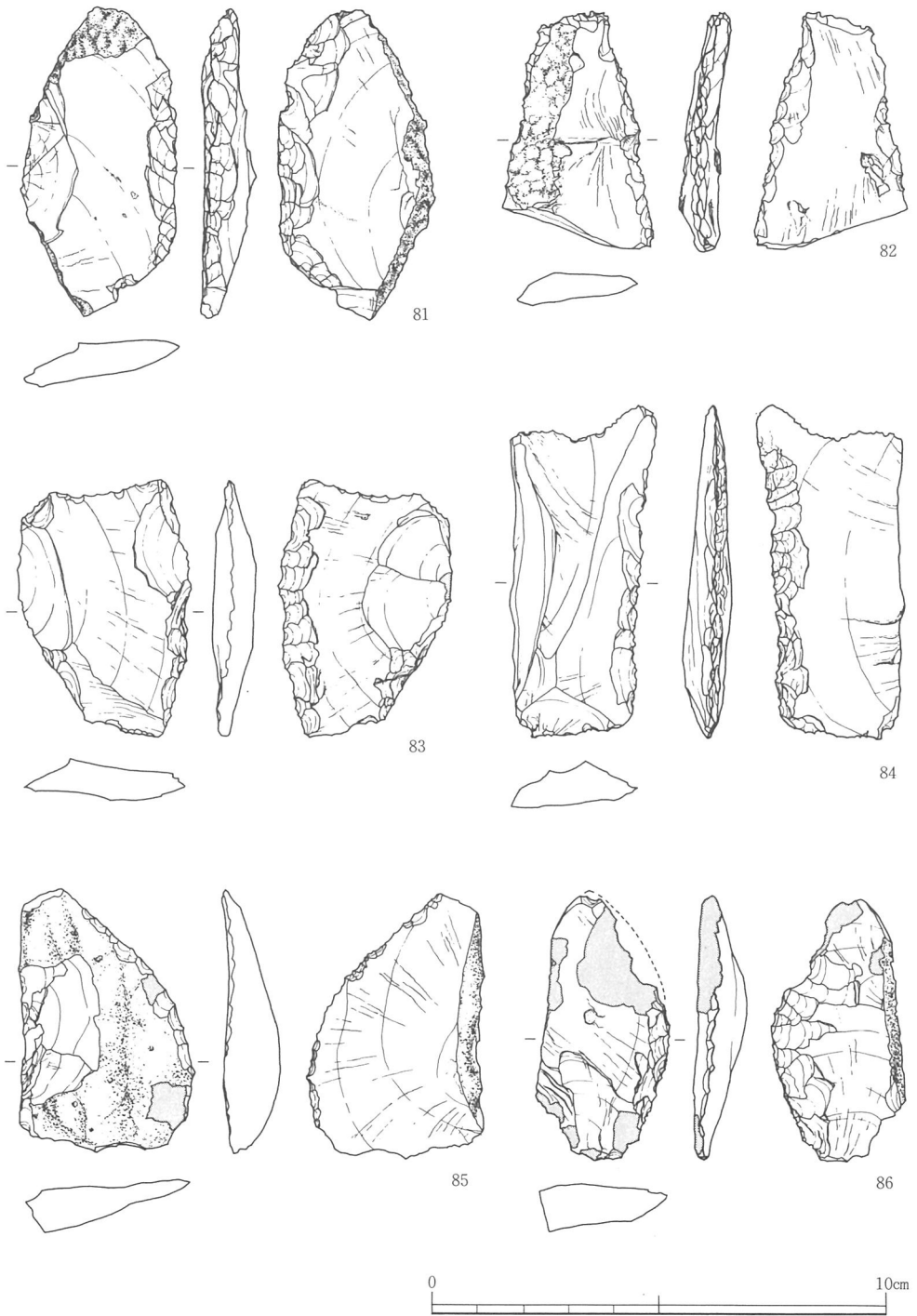
石錐は2点検出された。(56)は錐部を欠いているが把持部と錐部から構成される。把持部の断面は三角形である。原礫面上を加撃して得られた縦長剥片を用いており、主要剥離面をほぼそのまま残している。把持部下端はやや細かい調整剥離によって絞り込まれ錐部へ移行する。(57)は把持部と錐部が一体となっており、二等辺三角形の正面観を呈す



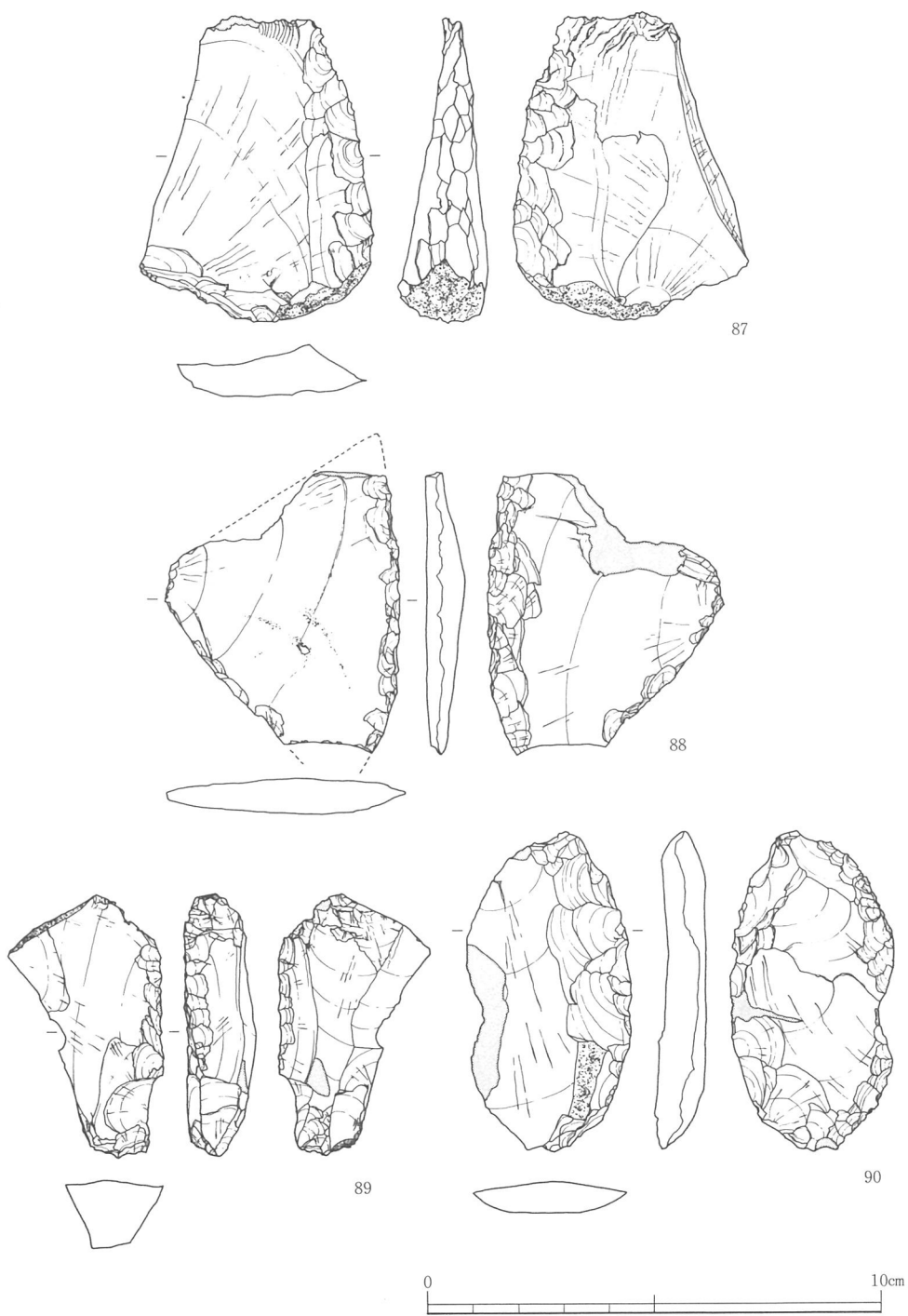
第22図 A～E区包含層出土遺物実測図（6）



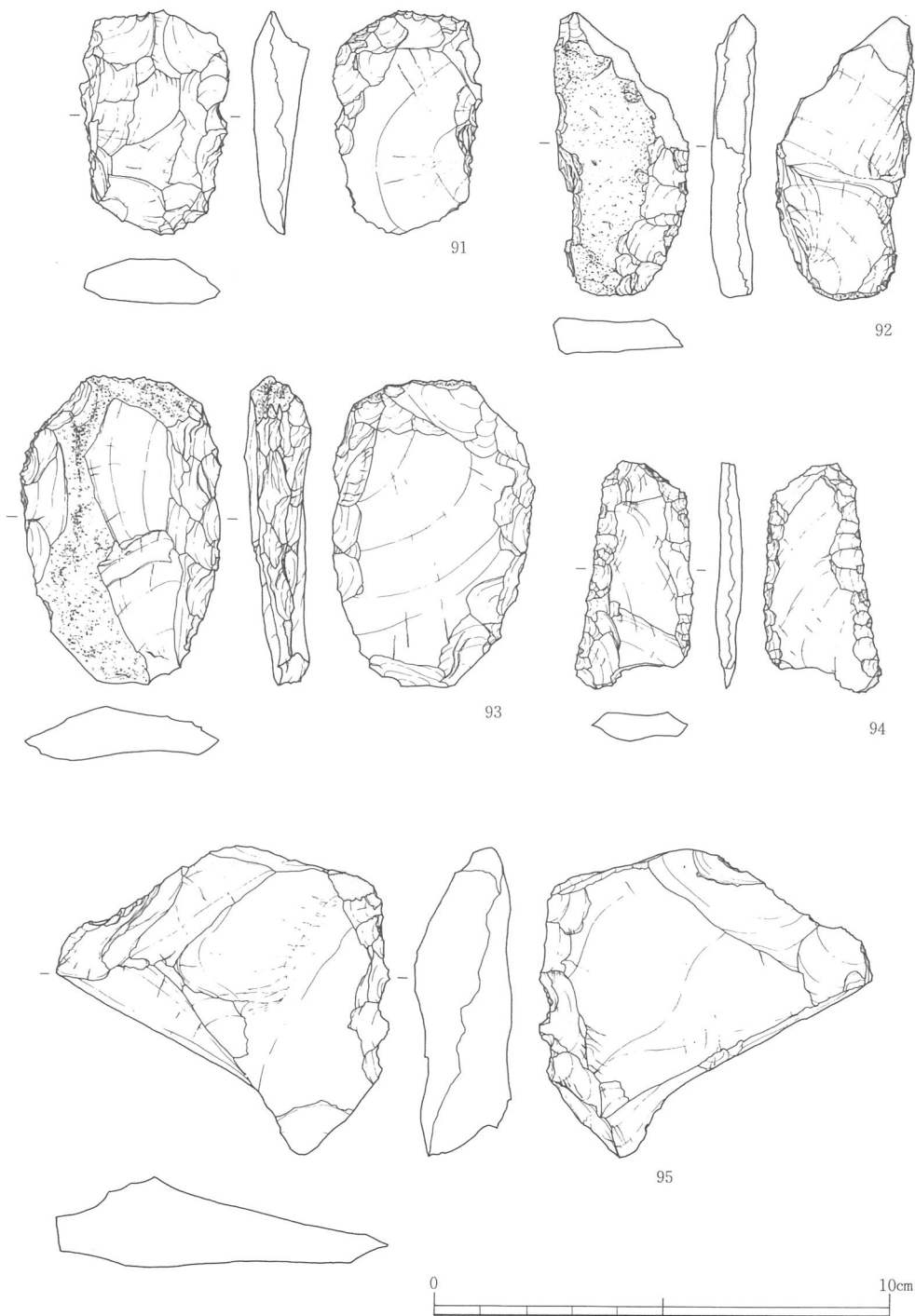
第23图 A~E区包含層出土遺物実測図(7)



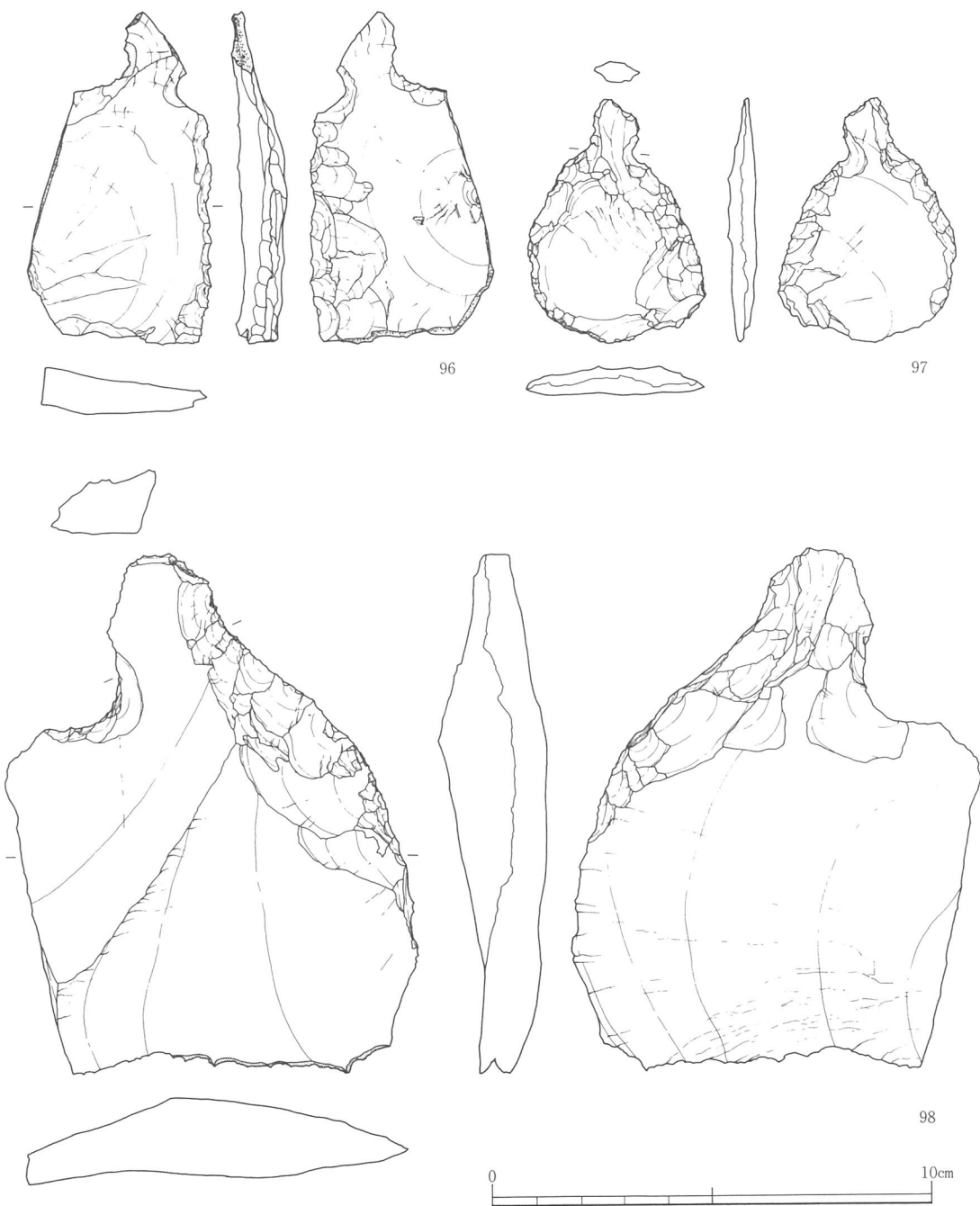
第24図 A～E区包含層出土遺物実測図(8)



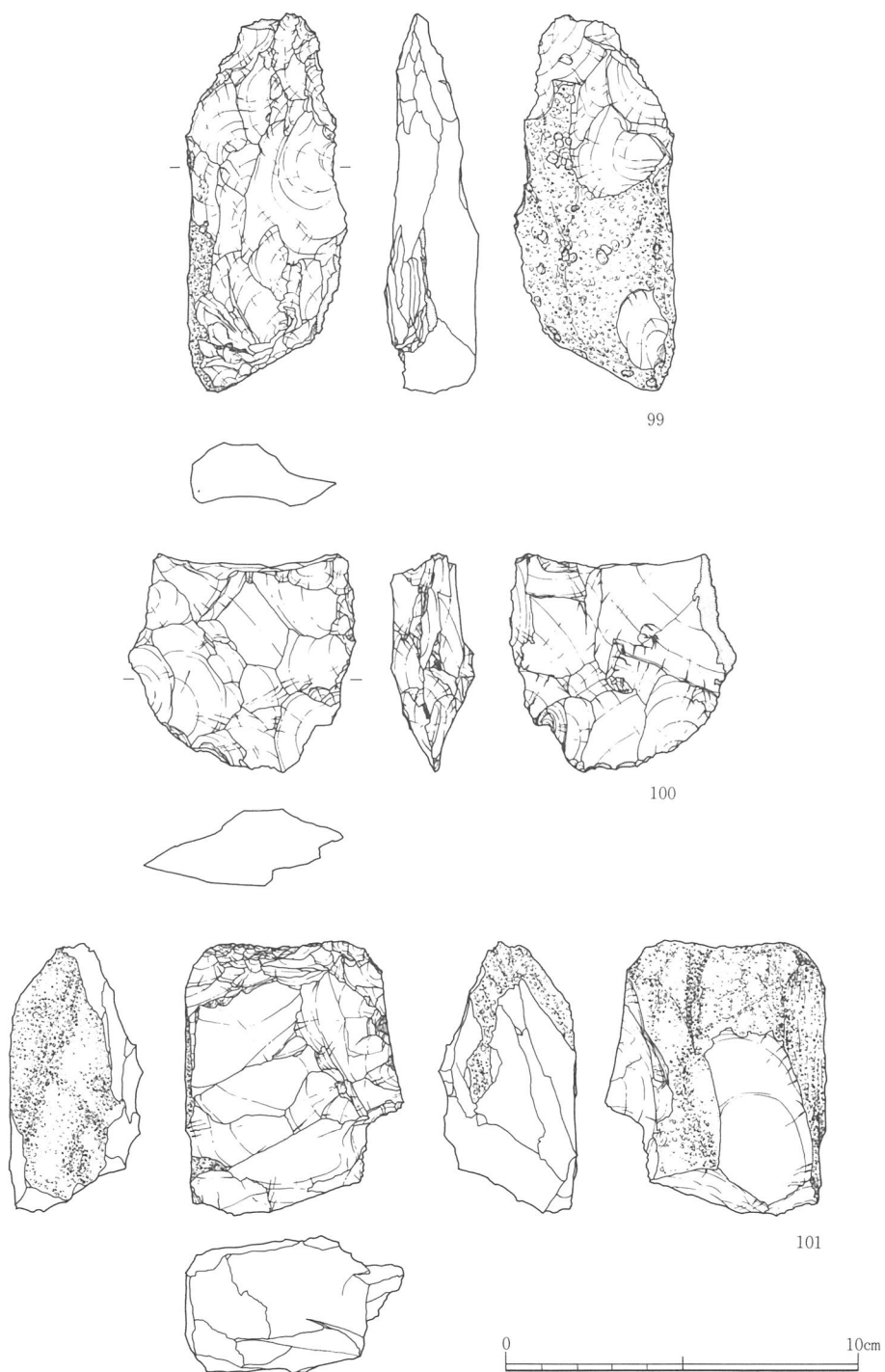
第25图 A~E区包含層出土遺物実測図(9)



第26图 A~E区包含層出土遺物実測図(10)



第27图 A~E区包含層出土遺物実測図(11)



第28图 A~E区包含層出土遺物実測図(12)

る。下部約2 cmが錐部で、やや細かい調整剥離によって鋭利な先端に仕上げている。

尖頭器（58～68）は11点が出土したが、複数の時代の遺物が混在していると思われる。破折した個体が多く、完存は1点のみである。逆刺の認められる個体は3点を数え、その形状から（58）は縄文時代草創期の有茎尖頭器、（64・65）は弥生時代の有茎尖頭器の可能性が考えられる。その他、先端部が尖鋭なもの（60）、あまり尖らないもの（62）があり、また（63・67・68）は調整剥離が粗く、未製品の可能性がある。（68）は逆刺を持っていない。

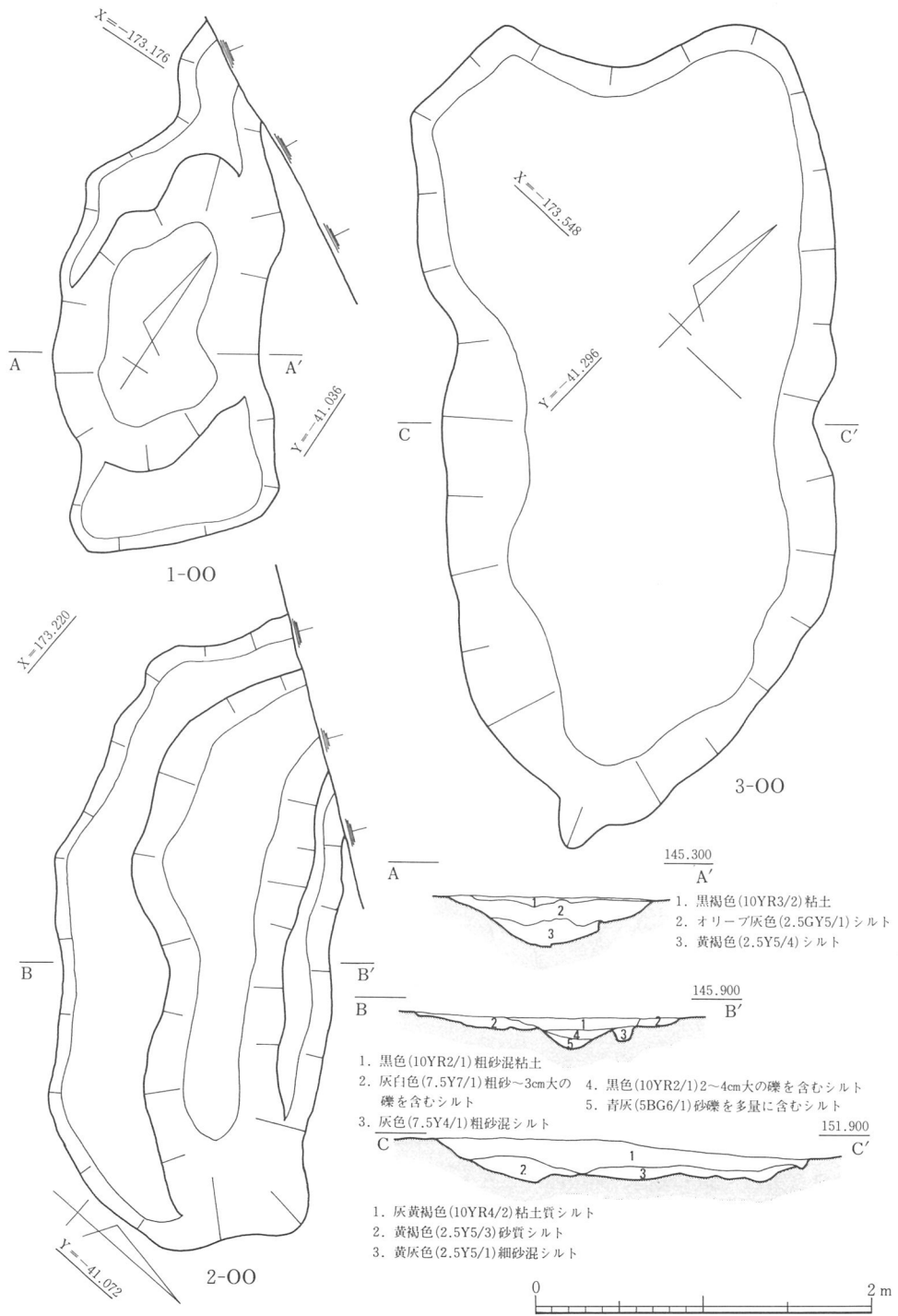
刃器（69～98）は合計35点が出土した。小破片以外の30点を図化し、概ねA～E区の出土地区順に配列した。ここでは刃器として一括して取り扱ったが、このうち（69～95）は、いわゆる削器、搔器、（96～98）はいわゆる石匙の範疇でとらえられるものである。刃器（69～95）については素材に縦長剥片、横長剥片、斜軸剥片を使用している。剥片の腹面は、刃部作出のための調整剥離以外は未加工が多いが、打瘤を取り、あるいは厚さを減じるために腹面に剥離作業を行った個体があった。刃部作出のための調整剥離は腹面、背面の両面から行われたものが多いが、一部に片側からのみ調整を加えた個体がある。刃部は剥片の辺縁部、もしくは、末端部に付けられている。刃部の形状は直線状、あるいは外湾状である。刃器（96～98）は、やや横長の剥片の末端あるいは辺縁、もしくはその両方に両面から刃部を作出している。また側縁の一部に把持部を作出する。特に（98）は大形の製品で、他の個体と比較して刃部の位置がやや異なり、把持部の一部に及ぶ。

石核は分類ができなかったが、主要な個体を図化した（99～101）。（99）は亜角礫を素材とし、不定形な剥片を交互剥離によって作出する。（100）は剥片を素材とし、腹面、背面から不定形な剥片を作出しているため、扁平な残核となっている。（101）は亜角礫を素材とし、多方向から加撃して不定形剥片を作出する。以上、原礫面の残る石核から、拳大の亜角礫を素材としたことがわかる。いずれも剥片の作出方法に規則性はみられない。

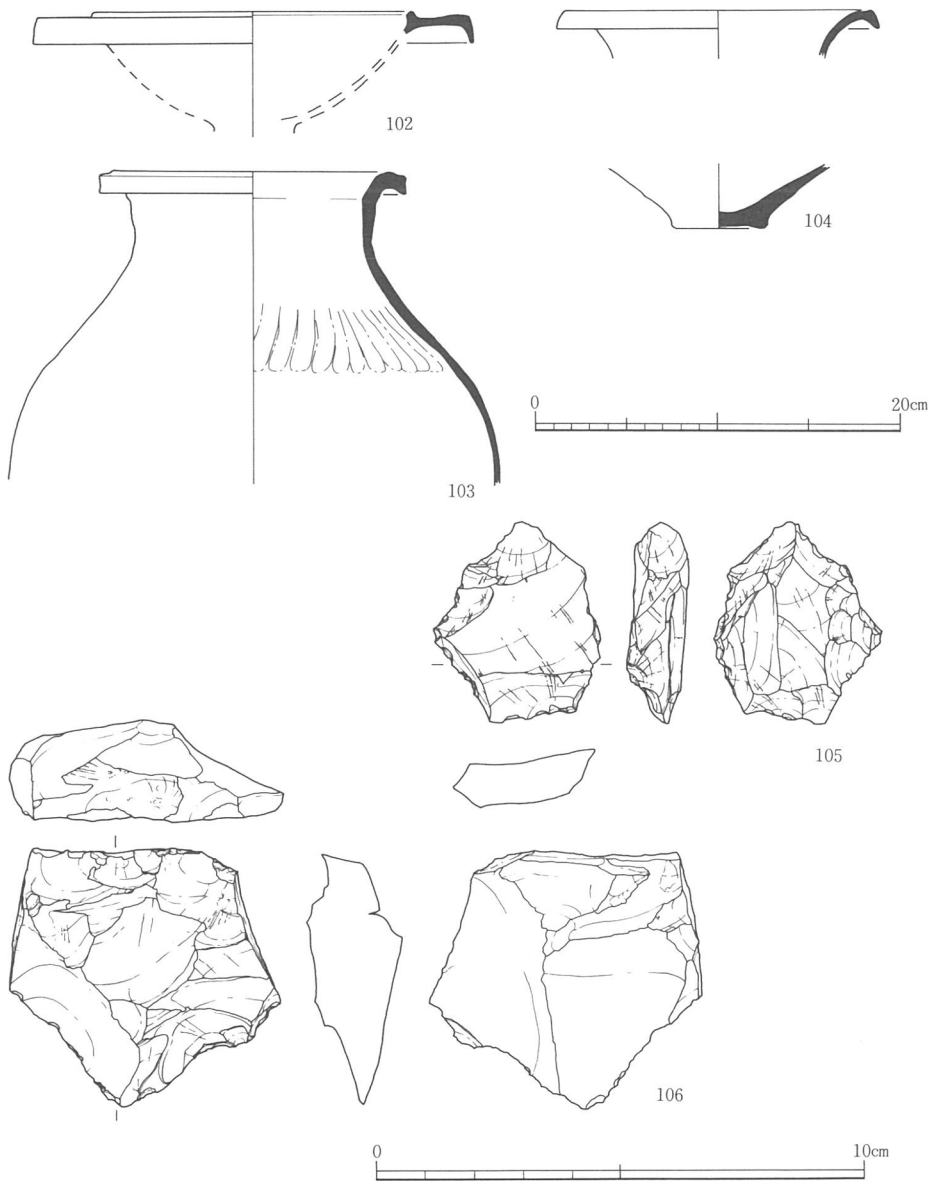
2. 遺構（第13～16・29～38図、図版一～六・二五・四二）

1 弥生時代

弥生時代の遺構は3基を確認し、そのうち2基はC区、1基はE区で検出された。C区の土壌はやや離れて存在している。



第29図 1・2・3-00平面図・断面図



第30図 1・2・3-〇〇出土遺物実測図

1-〇〇 (第14・29・30図、図版四・二五・四二)

C区で検出された土壌である。F10TPに位置する。平面形は不定形で、北側の一部を暗渠によって切られている。長軸3.0m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色(10YR 3/2)粘土、オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト、黄褐色(2.5Y5/4)シルトである。オリーブ灰色シルト層から、遺物として弥生土器高杯(102)、壺(103)、サヌカ

イト石核 (105) が出土している。

2-00 (第14・29・30図、図版四・四二)

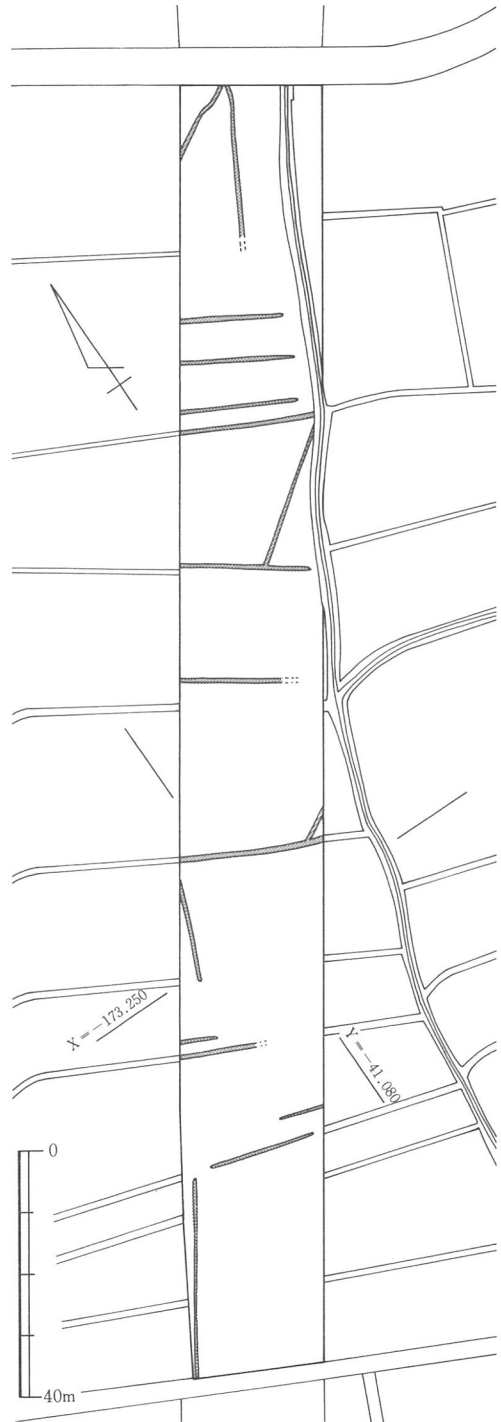
C区で検出された土壌である。F15EGに位置する。平面形は不定形で、西側は側溝によって切られている。長軸3.8m、短軸1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黒色(10YR2/1)粗砂混粘土、灰白色(7.5Y7/1)シルト、灰色(7.5Y4/1)粗砂混シルト等である。遺物として弥生土器壺(104)が灰色粗砂混シルト層の上面で検出されたが、遺存状態は不良であった。口縁部、底部ともに同一個体であるが、胴部の破片は接合できなかった。

3-00 (第16・29・30図、図版六・二五)

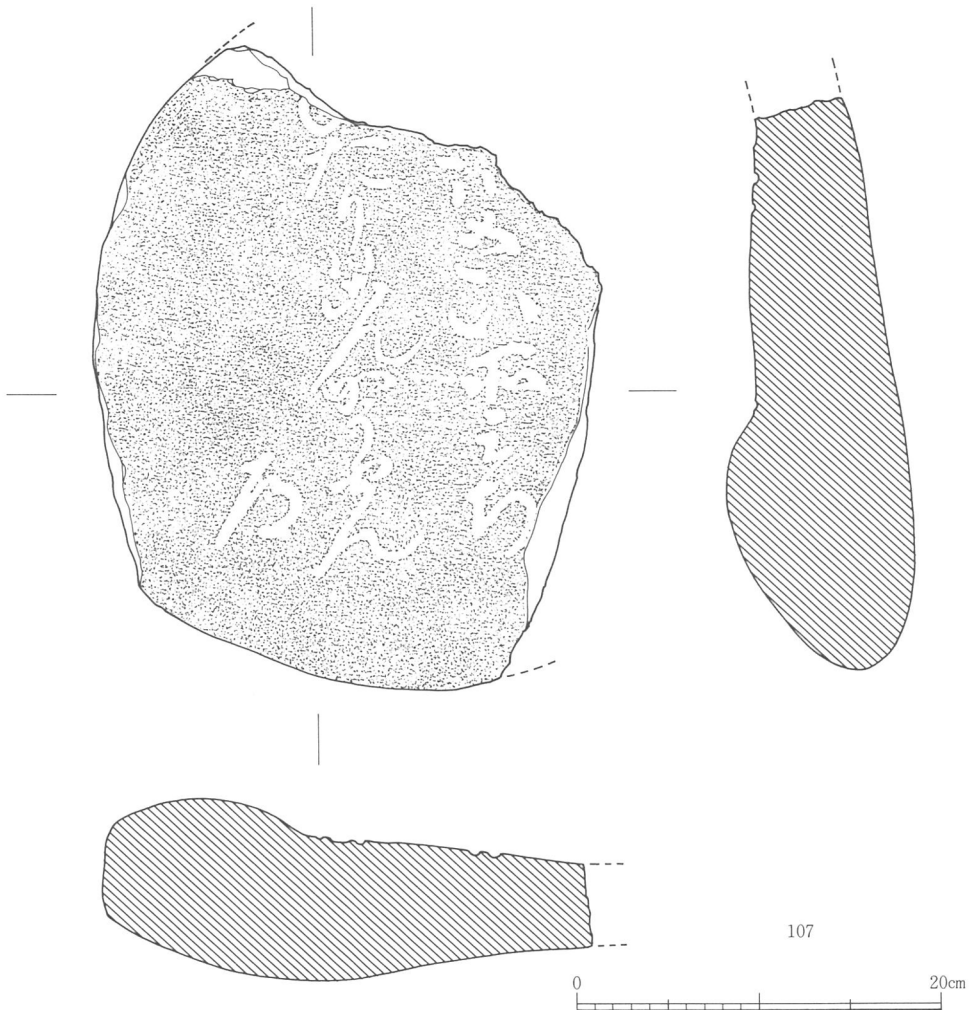
E区で検出された土壌で、J03LB周辺に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。長径4.6m、短径2.5m、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト、黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト、黄灰色(2.5Y5/1)細砂混シルトである。遺物として灰黄褐色粘土質シルト層から弥生土器鉢が出土しているが、摩耗が激しく細片となって図化できなかった。またサヌカイト石核(106)も出土している。

2 江戸時代

江戸時代には暗渠が設定されていた。暗渠はB～E・G区のⅣ層上面において検出



第31図 C区暗渠配置図



第32図 暗渠出土道標実測図

されている。C区の暗渠配置状況について図示した（第31図）が、概ね現在の水田の区画と位置的、方向的に合致するものが多い。構造はIV層に溝切りした後、礫もしくは竹を充填し、上部を粘土で塞いだものが主流である。また、瓦、陶磁器等を充填する例もあった。遺物からみると、暗渠の大半は江戸時代に属し、一部のものは近代に形成されたと考えられる。道標（第32図）は、F10X Lに位置する暗渠内から多量の礫とともに検出された。よく水磨された自然石を用いて表面に文字を刻印している。製作時と埋没時との時間差が少ないためであろうか、ほとんど摩耗することなく、良好に遺存している。右端部を欠失しており、現状での法量は縦35.0cm、横27.8cm、厚さ10.2cm、刻印は3行にわたり、文面

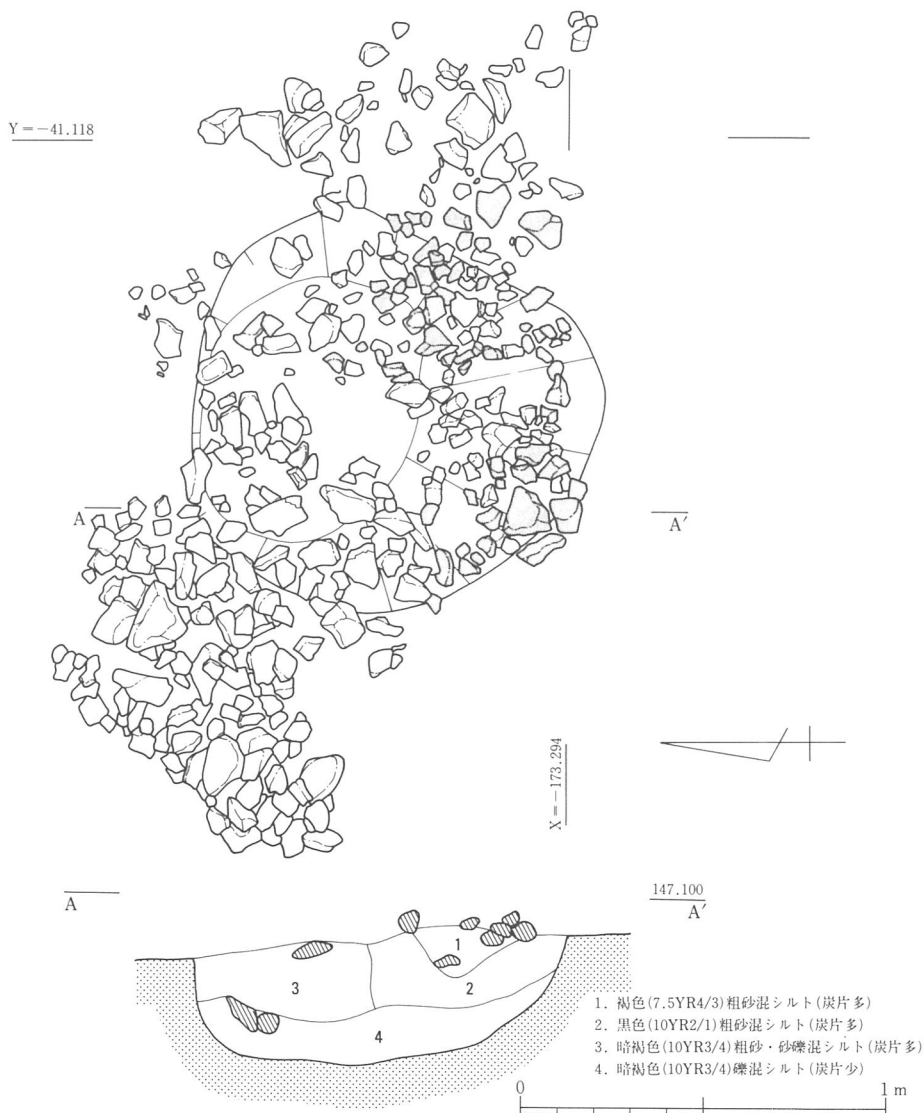
は以下のとおりである。

□□ハさい所ミち

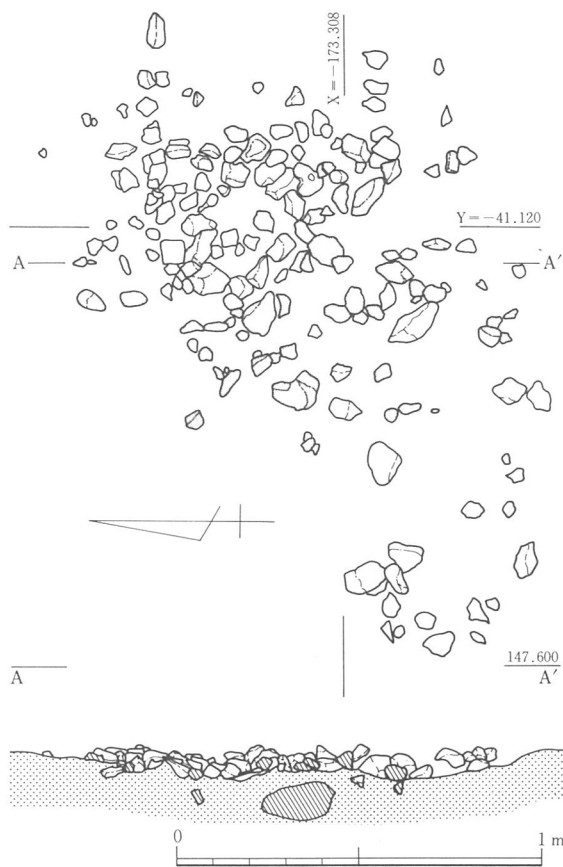
□たりハこんかうせん

道

この刻印は「右は在所道、左は金剛山道」と解釈される。当地では現在、金剛山を「こんごせ」「ごごせ」とも称する。



第33図 4-OX平面図・断面図



第34図 5-OX平面図・断面図

は不明である。

5-OX (第14・34図、図版三)

C区で検出された集石遺構である。F19BUに位置する。3～15cmの亜角礫を集めた遺構で、東西1.7m、南北1.4mの範囲に分布していた。礫は西側では散漫であるが、東側では集中していた。礫の表面は部分的に赤く変色しており、熱を受けた結果と考えられる。変色している範囲は東西1.1m、南北1.2mである。礫はIV層の直上に設置されていた。遺物は全く検出されず、時期は不明である。

6-OS (第16・35図、図版六)

E区で検出された溝である。調査区の南西、J02WQから出現し、北東方向に蛇行、調

3 時代不明

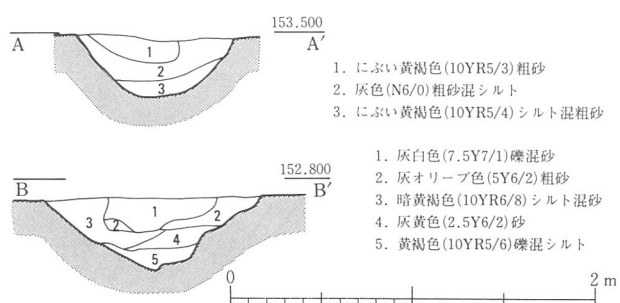
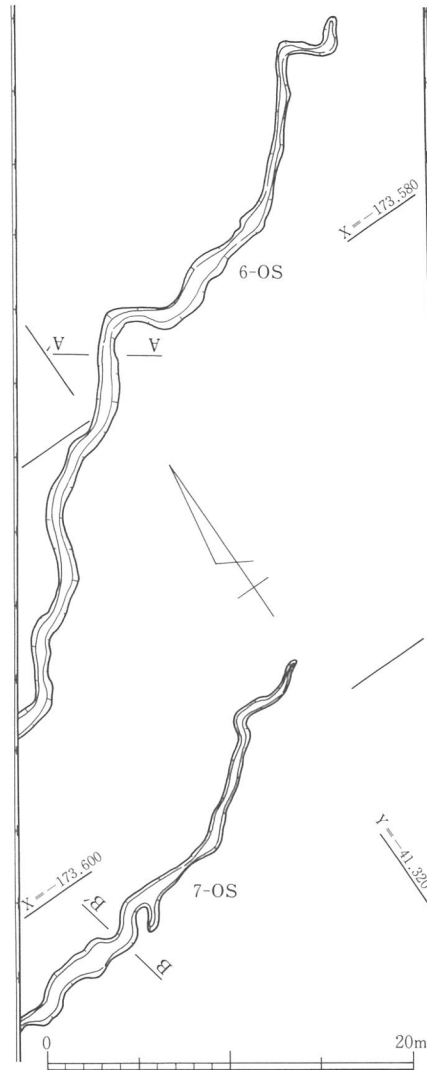
4-OX (第14・33図、図版三)

C区で検出された集石遺構である。F14WUに位置する。3～20cmの亜角礫を集めた遺構で、東西2.3m、南北1.4mの範囲に分布していた。礫には一部に重なりがみられるものの大半は平面的に設置されていた。礫群は南側の部分が、東西1.2m、南北1.0mの範囲で赤く焼けていた。礫群を取り除くと、その直下からは土壌が検出された。土壌の平面形は不整形を呈し、規模は東西1.0m、南北1.1m、深さ0.4mである。埋土は褐色(7.5 YR4/3)粗砂混シルト、黒色(10 YR2/1)粗砂混シルト等で、いずれも炭片を包含している。礫群と土壌との関係、および設置時期

査区内J03RAで消滅する。
 総延長43m、最大幅1.8m、
 深さ0.3mで、埋土はにぶい
 黄褐色(10YR5/3)粗砂、
 灰色(N6/0)粗砂混シルト、
 にぶい黄褐色(10YR5/4)
 シルト混粗砂等、砂を主体と
 する。遺物の出土はなく、時
 期は不明である。

7-O S (第16・35図、図版
 六)

E区で検出された溝である。
 調査区の南西、J07BOから
 出現し、北東方向に蛇行、調
 査区内J02YUで消滅する。
 総延長25m、最大幅1.8m、
 深さ0.4mである。埋土は灰
 白色(7.5Y7/1)礫混砂、灰
 オリーブ色(5Y6/2)粗砂
 等、砂を主体としている。規
 模の類似、埋土、位置的関係
 および走行方向からみて、本
 来は前出の6-O Sと同一の
 流れから分流したものと解釈
 される。いずれも地形の傾斜
 に従って走行しており、その
 形状から自然の流路であると
 考えられる。遺物の出土はな
 く、時期は不明である。



- 1. にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂
- 2. 灰色(N6/0)粗砂混シルト
- 3. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混粗砂
- 1. 灰白色(7.5Y7/1)礫混砂
- 2. 灰オリーブ色(5Y6/2)粗砂
- 3. 暗黄褐色(10YR6/8)シルト混砂
- 4. 灰黄色(2.5Y6/2)砂
- 5. 黄褐色(10YR5/6)礫混シルト

第35図 6・7-O S平面図・断面図

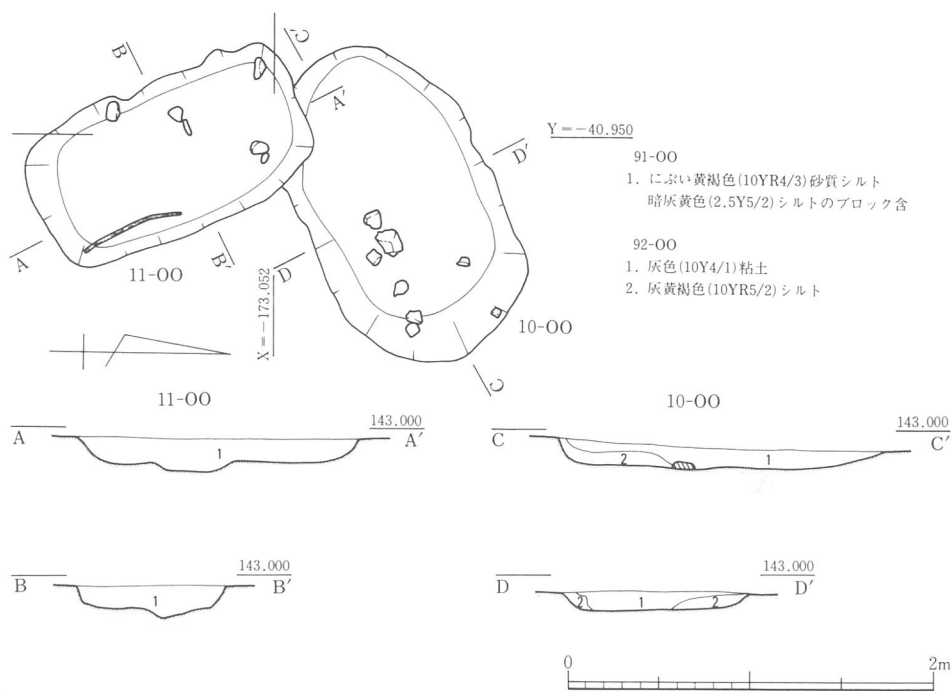


8-OX (第15・36図、図版五)

D区で検出した轍跡(8-OX)は、南側で3方向に分岐するが、北側ではほぼ1つに収束する。その中で中心的なものは、F19KM~F19QHにかけて検出したものである。総延長は83m、車軸幅は約1.5m、深さ0.05mを測り、いずれも車軸幅はほぼ同一である。埋土はいずれも灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルトである。これらを轍と判断した理由は、①一定の方向性を持ち、かつ連続していること、②幅がほぼ同一であること、である。これらの轍はいずれも、現在の水田区画溝に規制されておらず、明らかに区画溝構築以前に形成されたものである。これに対しF23OP~F23PSで検出した9-OXは、付近で検出した溝や水田区画溝とも平行する。またその幅が一定していないことから、耕作に伴う溝と判断した。

10-OO (第13・37図、図版二)

B区で検出された土壌で、G01LMに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.1mであった。埋土は灰色(10Y4/1)粘土と、灰黄褐色(10YR5/2)シルトの2層である。方位はN-63°-Eで、南西部を11-OOによって切られている。遺物は全く出土しなかった。



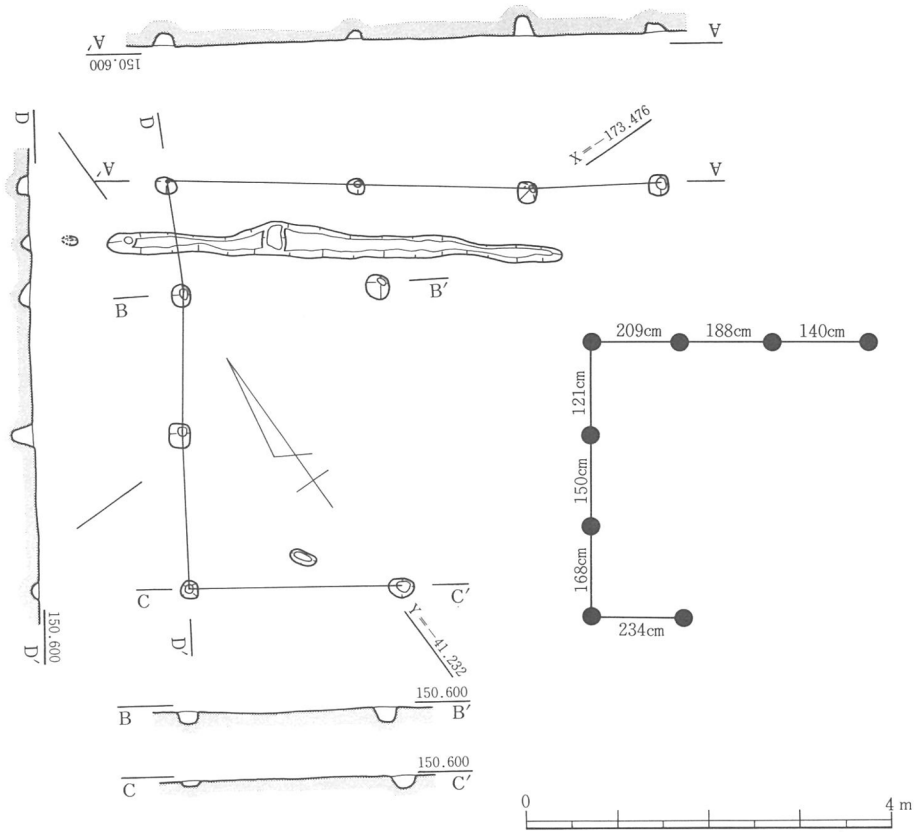
第37図 10・11-00平面図・断面図

11-00 (第13・37図、図版二)

B区で検出された土壌である。G01MMに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.2mであった。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトのブロックを含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトの1層である。方位はN-27°-Wで、北東隅において10-00を切っている。遺物は全く出土しなかったが、埋土の表層付近で木の枝が検出された。これは加工の跡がみられず、自然木である。10・11-00は形状からともにも墓の可能性が考えられる。

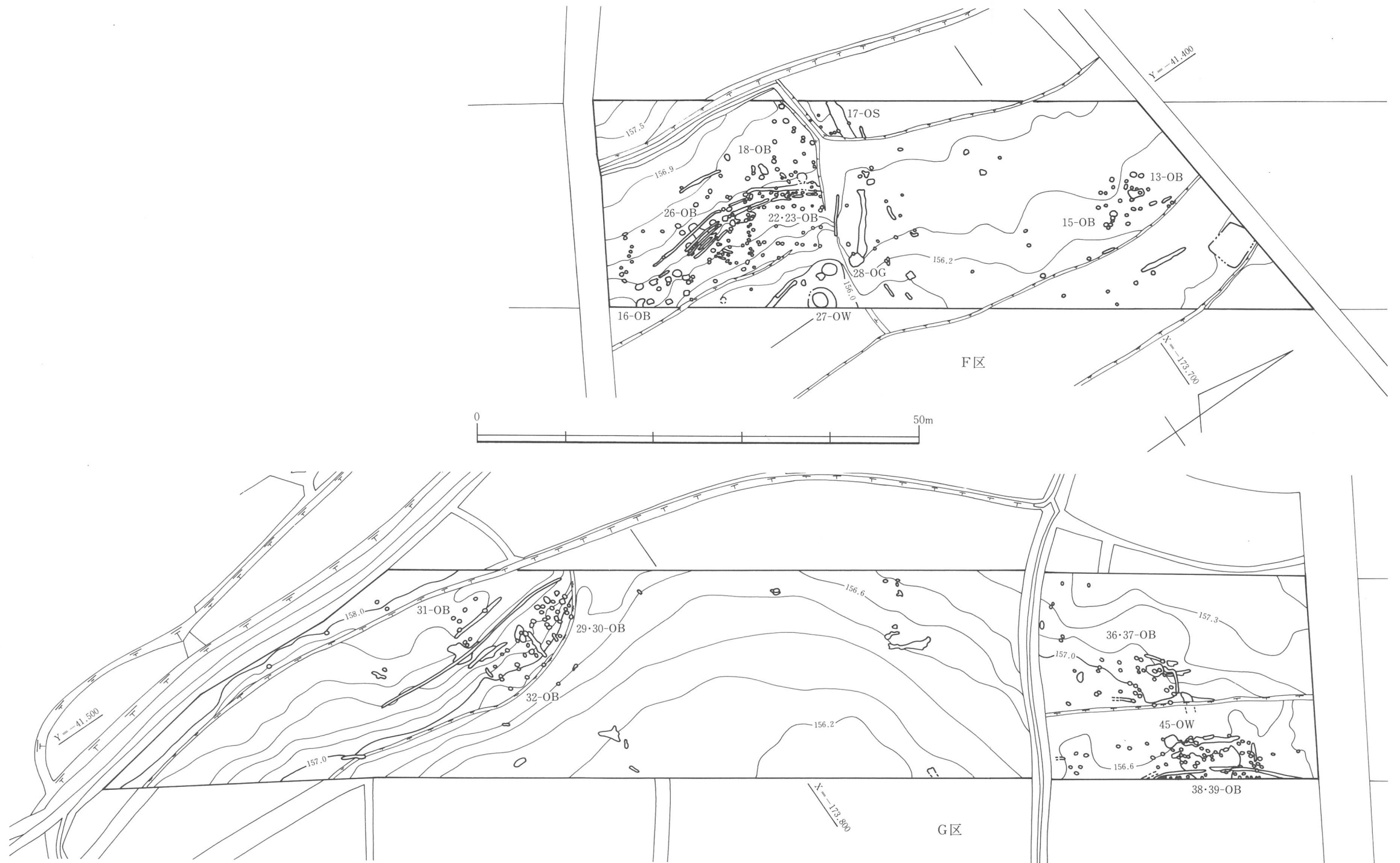
12-0B (第15・38図、図版五)

D区で検出された掘立柱建物跡である。F23SQ周辺に位置しており、建物主軸はN-55°-Wで、現在の水田区画の方向とはほぼ一致している。柱穴は建物を構成するすべてのものは検出されておらず、北側で3間、西側で3間、南側で1間の柱穴の関係が確認されたにとどまる。ゆえに本来の規模は不明である。柱穴径は直径25cm前後、深さ20cm前後で、概ね灰黄褐色(10YR6/2)シルトを埋土としている。掘方は確認されなかった。遺物は



第38図 12-O B平面図・断面図

検出されず、時期は不明である。なお、建物跡の北側柱穴列と平行して1条の溝が検出されているが、これは北西側に延びていくため、建物とは直接の関係を持たないであろう。



第39図 F・G区遺構配置図

第3節 F区の調査成果

F区は試掘調査や分布調査の結果、耕作土に大量の石器、サヌカイト片が含まれていた
ので、縄文時代の遺構の存在に期待がもたれたが、当該期の遺構は全く確認できなかった。
しかし、古墳時代の掘立柱建物跡2棟をはじめとして、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、溝
1条、平安時代の掘立柱建物跡4棟・井戸1基等や、鎌倉時代の木棺墓1基を検出した。
以下各時期の遺構を年代順に記載する。

1. 包含層出土遺物（第40～54図、図版一九～二一・三〇～四〇）

F区は調査区中央部を横断する水路を境に、北側の包含層が南側に比べ後世の削平をよ
り顕著に受けていたので、調査区南東部を除き残存状態が極めて悪かった。そのため図化
できる遺物数も非常に少なかったが、調査区北側では5世紀代の須恵器片が比較的めだち、
調査区南側では瓦器片が顕著であった。また石器、剥片類はII・III層中にも含まれており、
時には古墳、奈良、平安、鎌倉時代の遺構内から出土することもあった。

1 土器

包含層中から深鉢と考えられる縄文土器細片が5片出土したが、遺存状態は必ずしも良
好ではない。「D」字の爪形文が施されたもの（108）、「C」字の爪形文が施されたも
の（109）、羽状

縄文が施されたも
の（110）がある。

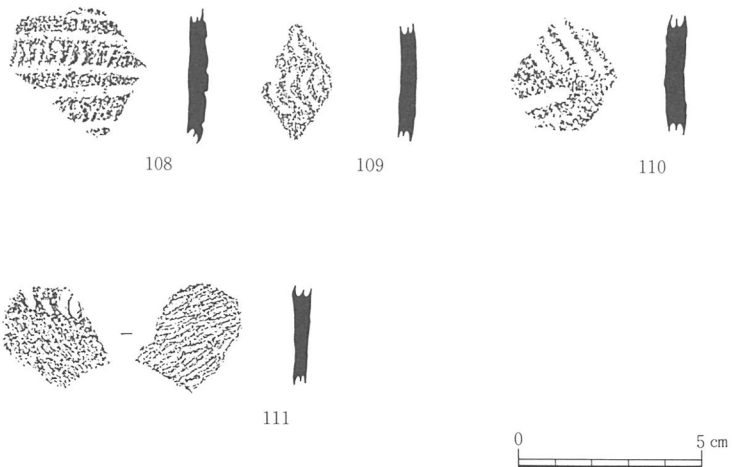
また（111）は
「C」字の爪形文

が施され、内面
には貝殻条痕が残る。

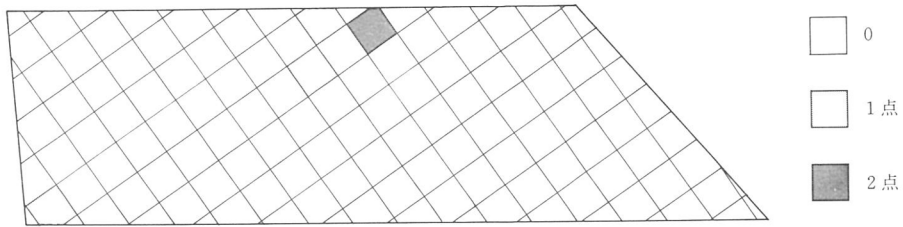
いずれも縄文時代
前期、北白川下層

I・II式を中心と
する土器と考えら

れる。これら縄文



第40図 F区包含層出土遺物実測図（1）



第41図 F区出土縄文土器分布図

土器の分布状況を第41図に示したが、F区中央部西側に集中する傾向にある。

須恵器類の出土量は、相対的にそれほど多くない。須恵器蓋と判断した(112)は、外面に手持ちヘラケズリが施されており、5世紀代のものと考えられる。

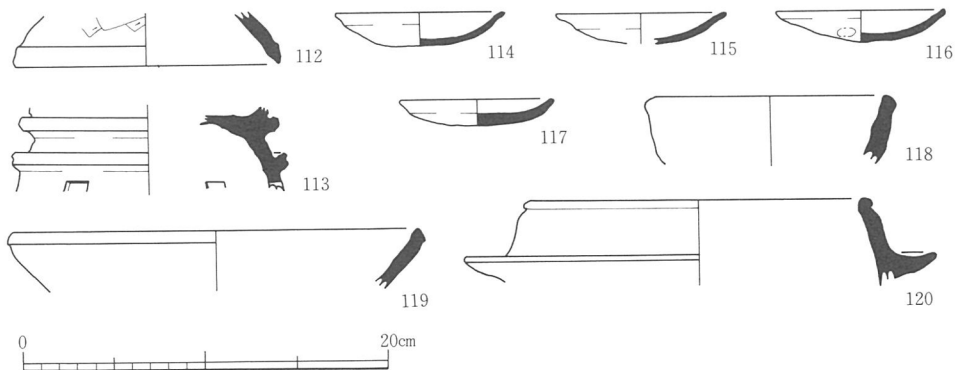
瓦器類はF区包含層出土遺物の中心を占めるが、細片が多いため、図化できる資料は他の地区と同様非常に少ない。しかし他の調査区と比較すると、内外面にヘラミガキを施した破片が比較的顕著であった。

その他、土師質小皿(114~117)や製塩土器(118)、須恵質鉢(119)、土師質羽釜(120)等が出土している。

2 その他

円面硯(113)は、後述する16-OBの北側J11IYで出土した。硯面部は内堤を持たず、縁は欠損している。また脚台部には2本の凸帯がめぐり、脚台部透かし付近にヘラ記号「×」がある。凸帯等の調整をみるかぎり、粗雑な感が否めない。

また第I層中から火縄銃の弾丸と思われる鉛玉2点(346・347)も出土している。各々の重量は5.61g、6.24gを測る。



第42図 F区包含層出土遺物実測図(2)

3 石器

F区ではI～III層中に石鏃、石錐、刃器等の石器のほか、大量のサヌカイト剥片、碎片、石核等の石器製作時に生成される廃棄物が包含されていた。高向遺跡では、試掘調査の時点で調査区の一部、すなわち南端部付近において、サヌカイト類に限られた面積のうちに分布することが確認されていた。水田、畑地1枚単位の表面観察の結果では、分布はF区に限らず、E区の南端とその周辺に広がっている(第43図)。濃密な分布は南北120m、東西90mにわたるが、図示した地区から離れるに従い、分布密度は急速に低下する。このような状況からE・F区あるいはその付近に、石器時代に属する遺構の存在が予想された。E区では実施しえなかったが、表面観察の結果から遺物分布密度の最も高いF区において、遺物の回収とその分布状況を明らかにする目的で、I層の一部を選定し水洗作業を実施した。II・III層は人力掘削によった。

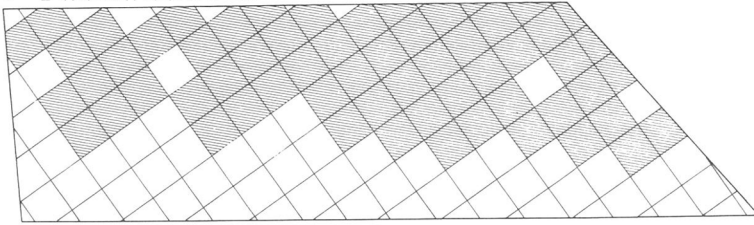
I層の水洗地区は、当協会で定めた区画割りに準拠して設定した。区画の呼称法もまた同様である。区画の最小単位は4m×4m、面積16㎡である。F区に包含される地区は、調査区の端にあたる極小面積の区画も併せて134区画、面積1670.9㎡となるが、そのうち北西側の60区画、面積877.7㎡についてI層を採集し水洗した(第44図-1)。

I層は耕作による攪乱を受けていることが明らかなため、原位置論的調査は行わず、区画ごとに土壌を一括採集し、3mm目のフルイによる水洗選別作業を行い、微細遺物を含む大半の遺物採集に努めた。その結果、回収された遺物を分類後、出土点数をカウントし、またそれぞれの重量を計測して集計表を作成した(第3～5表)。分類の基準は、まず製品と廃棄物とに大別した。製品には石鏃、石錐、刃器、異形石器、楔形石器

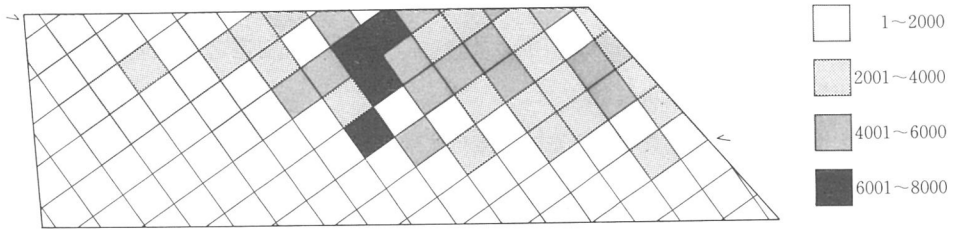


第43図 F区周辺石器類分布範囲

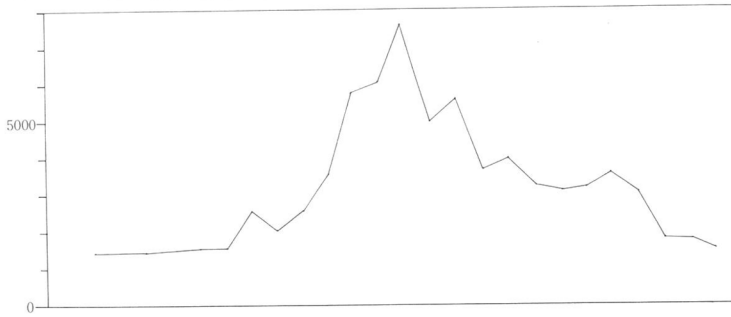
44-1 I層水洗作業実施区域



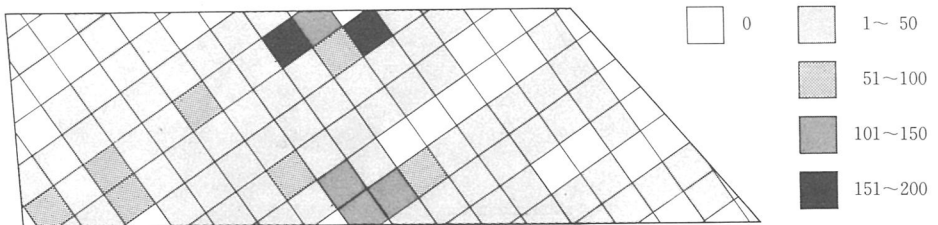
44-2A I層石器類平面分布図



44-2B 石器類出土点数縦断グラフ



44-3 II・III層石器類平面分布図



第44図 F区石器類平面分布図

第3表 F区I層石器類集計表(1)

地区	数量(点) 重量(g)	石器								廃棄物						合計
		石 鏃			石 錐	刃 器	異形石器	楔形石器	石 核	剥 片			碎 片			
		サヌカイト	チャート	計						無加工	二次加工	計	サヌカイト	チャート	計	
J07VA	数量	13	0	13	0	1	0	0	0	28	4	32	1141	1	1142	1188
	重量	4.36	0	4.36	0	1.57	0	0	0	64.81	17.79	82.60	149.68			238.21
J07VB	数量	12	0	12	0	0	0	0	0	24	4	28	1733	5	1738	1778
	重量	3.70	0	3.70	0	0	0	0	0	84.26	35.72	119.98	221.91			345.59
J07VC	数量	10	1	11	0	0	0	1	0	28	1	29	1758	2	1760	1801
	重量	3.60	0.35	3.95	0	0	0	9.84	0	107.81	0.78	108.59	232.98			355.36
J07VE	数量	17	0	17	0	0	0	0	1	12	2	14	172	3	175	207
	重量	6.07	0	6.07	0	0	0	0	6.13	28.46	6.51	34.97	299.29			346.46
J06WY	数量	8	0	8	0	0	0	0	0	28	6	34	848	0	848	890
	重量	1.04	0	1.04	0	0	0	0	0	59.00	19.48	78.48	107.42			186.94
J07WA	数量	29	1	30	0	0	0	0	1	32	1	33	1433	4	1437	1501
	重量	10.95	0.14	11.09	0	0	0	0	3.77	84.11	5.96	90.07	266.29			371.22
J07WB	数量	47	1	48	0	0	0	0	6	94	8	102	5122	0	5122	5278
	重量	17.82	1.07	18.89	0	0	0	0	58.86	249.56	38.61	288.17	842.18			1208.10
J07WC	数量	61	0	61	0	0	0	0	0	79	12	91	4641	1	4642	4794
	重量	21.68	0	21.68	0	0	0	0	0	281.55	49.40	330.95	908.82			1261.45
J07WD	数量	22	0	22	0	0	0	0	0	39	4	43	1700	0	1700	1765
	重量	13.09	0	13.09	0	0	0	0	0	95.99	18.60	114.59	255.89			383.57
J07WE	数量	10	0	10	1	0	0	0	1	59	7	66	2126	0	2126	2204
	重量	4.61	0	4.61	0.45	0	0	0	4.96	196.12	30.27	226.39	413.88			650.29
J06XX	数量	15	0	15	0	0	0	1	0	43	2	45	1503	4	1507	1568
	重量	14.88	0	14.88	0	0	0	11.14	0	115.18	19.40	134.58	162.78			323.38
J06XY	数量	37	0	37	0	0	0	0	2	126	2	128	3557	0	3557	3724
	重量	14.49	0	14.49	0	0	0	0	5.68	293.17	12.79	305.96	421.40			747.53
J07XA	数量	24	0	24	0	0	0	0	1	39	3	42	2346	0	2346	2413
	重量	11.86	0	11.86	0	0	0	0	15.76	100.07	15.95	116.02	829.50			973.14
J07XC	数量	41	1	42	0	0	0	0	2	95	4	99	3380	9	3389	3532
	重量	23.20	0.55	23.75	0	0	0	0	18.34	240.61	19.39	260.00	502.74			804.83
J07XD	数量	50	0	50	1	0	0	0	0	24	8	32	1864	0	1864	1947
	重量	14.65	0	14.65	2.70	0	0	0	0	120.03	42.08	162.11	478.34			657.80
J06YX	数量	18	0	18	0	0	0	0	1	41	3	44	1872	3	1875	1938
	重量	9.62	0	9.62	0	0	0	0	5.41	126.76	24.42	151.18	249.08			415.29
J06YY	数量	39	0	39	0	0	0	0	1	97	8	105	4064	8	4072	4217
	重量	23.52	0	23.52	0	0	0	0	14.37	239.53	40.36	279.89	440.52			758.30
J07YA	数量	33	0	33	1	0	0	0	0	17	0	17	4298	2	4300	4351
	重量	8.88	0	8.88	0.46	0	0	0	0	95.70	0	95.70	829.50			934.54
J07YB	数量	41	0	41	0	0	0	0	2	35	0	35	2974	1	2975	3053
	重量	17.34	0	17.34	0	0	0	0	24.96	121.39	0	121.39	502.98			666.67
J07YC	数量	29	0	29	1	0	0	0	0	62	9	71	2532	0	2532	2633
	重量	7.95	0	7.95	0.16	0	0	0	0	144.87	35.14	180.01	433.71			621.83

第4表 F区I層石器類集計表(2)

地区	数量(点) 重量(g)	石器							廃棄物						合計	
		石 鏃			石 錐	刃 器	異形石器	楔形石器	石 核	剥 片			碎 片			
		サヌカイト	チャート	計						無加工	二次加工	計	サヌカイト	チャート		計
J11AW	数量	41	1	42	0	1	0	0	1	57	7	64	4430	1	4431	4539
	重量	17.56	0.10	17.66	0	7.28	0	0	4.22	191.92	38.02	229.94	632.46			891.56
J11AX	数量	26	0	26	0	0	2	0	0	58	5	63	2371	3	2374	2465
	重量	6.62	0	6.62	0	0	1.24	0	0	178.81	34.24	213.05	343.31			564.22
J11AY	数量	33	0	33	1	0	0	0	3	35	3	38	4197	1	4198	4273
	重量	22.32	0	22.32	1.20	0	0	0	12.39	106.72	16.54	123.26	482.60			641.77
J12AA	数量	39	0	39	0	0	0	0	2	51	6	57	3824	0	3824	3922
	重量	12.30	0	12.30	0	0	0	0	19.76	146.12	52.97	199.09	659.54			890.69
J12AB	数量	14	0	14	0	1	0	0	1	25	4	29	1499	6	1505	1550
	重量	5.39	0	5.39	0	10.94	0	0	15.74	66.15	22.33	88.48	219.20			339.75
J11BW	数量	52	0	52	0	2	0	0	6	140	9	149	6843	12	6855	7064
	重量	18.65	0	18.65	0	5.85	0	0	115.09	365.95	54.33	411.28	863.84			1414.71
J11BX	数量	57	0	57	0	0	0	0	2	22	14	36	4797	0	4797	4892
	重量	27.20	0	27.20	0	0	0	0	20.54	135.43	63.65	199.08	547.86			794.68
J11BY	数量	43	1	44	0	0	0	0	0	103	5	108	5450	4	5454	5606
	重量	20.69	0.27	20.96	0	0	0	0	0	298.96	13.45	312.41	647.32			980.69
J12BA	数量	11	0	11	0	0	0	0	1	16	0	16	801	2	803	831
	重量	5.39	0	5.39	0	0	0	0	10.90	31.85	0	31.85	129.17			177.31
J12BB	数量	21	0	21	0	0	0	0	1	58	9	67	2058	3	2061	2150
	重量	10.71	0	10.71	0	0	0	0	4.83	138.66	42.62	181.28	349.24			546.06
J11CV	数量	32	0	32	0	0	0	0	0	25	1	26	4011	2	4013	4071
	重量	12.88	0	12.88	0	0	0	0	0	157.18	11.78	168.96	775.62			957.46
J11CW	数量	66	0	66	0	0	0	0	3	32	4	36	7541	13	7554	7659
	重量	21.05	0	21.05	0	0	0	0	51.52	135.14	20.44	155.58	1020.25			1248.40
J11CX	数量	56	1	57	1	3	0	0	0	111	10	121	7437	4	7441	7623
	重量	18.35	1.28	19.63	4.42	49.54	0	0	0	321.47	67.53	389.00	879.12			1341.71
J11CY	数量	19	0	19	0	0	0	0	3	44	5	49	1721	2	1723	1794
	重量	4.82	0	4.82	0	0	0	0	25.99	101.72	23.66	125.38	287.57			443.76
J12CA	数量	55	0	55	1	0	0	0	3	67	6	73	4743	1	4744	4876
	重量	19.25	0	19.25	0.23	0	0	0	30.33	195.52	44.35	239.87	788.44			1078.12
J11DU	数量	18	0	18	0	0	0	0	0	1	3	4	818	0	818	840
	重量	8.00	0	8.00	0	0	0	0	0	6.36	21.40	27.76	158.81			194.57
J11DV	数量	5	0	5	1	0	0	0	1	5	1	6	1109	1	1110	1123
	重量	3.29	0	3.29	1.83	0	0	0	3.41	12.29	1.27	13.56	140.98			163.07
J11DW	数量	39	2	41	2	0	1	0	3	79	10	89	5642	0	5642	5778
	重量	17.07	0.62	17.69	4.02	0	1.97	0	32.76	212.28	58.77	271.05	786.82			1114.31
J11DX	数量	30	0	30	0	0	0	0	2	100	7	107	3077	3	3080	3219
	重量	10.14	0	10.14	0	0	0	0	19.20	297.20	75.07	372.27	378.80			780.41
J11DY	数量	81	0	81	2	1	1	0	3	11	8	19	7634	7	7641	7748
	重量	27.91	0	27.91	2.46	35.61	0.97	0	44.47	391.94	46.65	438.59	1126.52			1676.53

第5表 F区I層石器類集計表(3)

地区	数量(点) 重量(g)	石器							廃棄物						合計	
		石 鏃			石錐	刃器	異形石器	表形石器	石核	割 片			碎 片			
		サヌカイト チャート	計	計						無加工	二次加工	計	サヌカイト チャート	計		計
					数量	重量	数量	重量	数量							
J11EU	数量	8	0	8	0	0	0	0	16	1	17	1479	4	1483	1508	
	重量	2.48	0	2.48	0	0	0	0	47.41	0.22	47.63	177.10			227.21	
J11EV	数量	18	0	18	0	0	1	0	2	55	5	60	2484	0	2484	2565
	重量	8.28	0	8.28	0	0	1.46	0	15.90	131.73	37.95	169.68	1126.52			1321.84
J11EW	数量	47	0	47	1	0	0	0	3	40	6	46	4555	16	4571	4668
	重量	14.48	0	14.48	1.08	0	0	0	48.19	127.85	37.61	165.46	735.70			964.91
J11FT	数量	1	0	1	1	0	0	0	0	2	0	2	326	0	326	330
	重量	0.34	0	0.34	1.35	0	0	0	0	75.80	0	75.80	59.73			137.22
J11FU	数量	34	0	34	0	1	0	0	1	60	12	72	2431	0	2431	2539
	重量	18.61	0	18.61	0	1.39	0	0	5.32	173.10	84.30	257.40	438.80			721.52
J11FV	数量	15	0	15	0	1	0	0	2	29	7	36	1358	1	1359	1413
	重量	6.90	0	6.90	0	77.61	0	0	23.25	168.52	55.18	223.70	189.42			520.88
J11FW	数量	6	0	6	0	0	0	0	1	18	0	18	948	0	948	973
	重量	1.86	0	1.86	0	0	0	0	5.58	65.24	0	65.24	164.55			237.23
J11GT	数量	12	0	12	0	0	0	0	1	30	3	33	1482	0	1482	1528
	重量	3.49	0	3.49	0	0	0	0	6.72	59.61	29.91	89.52	185.77			285.50
J11GV	数量	8	0	8	0	0	0	0	0	39	4	43	1904	3	1907	1958
	重量	3.86	0	3.86	0	0	0	0	0	91.62	30.04	121.66	282.45			407.97
J11GW	数量	13	0	13	0	0	0	0	3	5	2	7	1090	0	1090	1113
	重量	4.00	0	4.00	0	0	0	0	23.09	39.73	2.01	41.74	179.86			248.69
J11HS	数量	21	0	21	0	0	1	0	1	30	4	34	1366	9	1375	1432
	重量	7.23	0	7.23	0	0	0.73	0	4.52	62.04	33.34	95.38	358.35			466.21
J11HT	数量	19	0	19	1	0	0	0	1	36	4	40	2604	1	2605	2666
	重量	7.67	0	7.67	0.74	0	0	0	12.39	110.73	28.47	139.20	369.88			529.88
J11HU	数量	21	0	21	1	0	0	0	0	21	0	21	1464	0	1464	1507
	重量	5.65	0	5.65	0.23	0	0	0	0	336.95	0	336.95	251.12			593.95
J11IR	数量	7	0	7	0	0	1	0	0	25	2	27	1293	3	1296	1331
	重量	1.57	0	1.57	0	0	1.38	0	0	66.06	7.28	73.34	138.86			215.15
J11IS	数量	5	0	5	0	0	0	0	0	26	0	26	1271	7	1278	1309
	重量	0.78	0	0.78	0	0	0	0	0	71.65	0	71.65	136.81			209.24
J11IT	数量	4	0	4	0	0	0	0	0	17	3	20	783	2	785	809
	重量	1.79	0	1.79	0	0	0	0	0	45.54	16.99	62.53	88.09			152.41
J11IU	数量	1	0	1	0	0	0	0	0	5	0	5	358	0	358	364
	重量	0.37	0	0.37	0	0	0	0	0	4.49	0	4.49	26.18			31.04
J11JR	数量	3	0	3	0	0	0	0	0	1	1	2	646	0	646	651
	重量	1.76	0	1.76	0	0	0	0	0	9.77	3.50	13.27	83.49			98.52
J11JT	数量	7	1	8	0	0	0	0	0	7	0	7	1608	1	1609	1624
	重量	2.34	1.21	3.55	0	0	0	0	0	16.17	0	16.17	117.63			137.35
J11JU	数量	12	0	12	0	0	0	0	0	22	3	25	1004	0	1004	1041
	重量	5.14	0	5.14	0	0	0	0	0	69.34	6.54	75.88	164.90			245.92
合計	数量	1556	10	1566	16	11	7	2	68	2526	262	2788	159521	155	159676	164134
	重量	621.50	5.59	627.09	21.33	189.79	7.75	20.98	714.35	8114.00	1506.06	9620.06	25041.57			36242.92

第6表 F区石器類出土点数補正表

地区	面積(m ²)	面積比(%)	出土点数	補正值
J07VA	5.6	35	1188	3237
J07VB	7.0	44	1778	3756
J07VC	8.2	51	1801	3880
J07VE	11.2	70	207	296
J06WY	7.2	45	890	4034
J06XX	2.2	14	1568	4742
J06XY	15.5	97	3724	3839
J06YX	12.4	78	1938	2485
J11AW	8.0	50	4539	5209
J11BW	15.8	99	7064	7135
J11CV	13.8	86	4071	4734
J11DU	9.2	58	840	2278
J11EU	15.9	99	1508	1523
J11FT	14.5	91	330	363
J11IR	14.9	93	1331	1431
J11JR	12.3	77	651	845

の項目を設けた。刃器は削器、搔器、石匙を総称している。なお、製品とした中にも便宜的に未製品を含めた。これは未製品の定義付けが困難で、どの調整段階まで未製品に含めるのか判断できない場合があるためである。廃棄物として、石器製作時に生じる剥片、破片、石核を総称した。剥片は便宜的に長さ2.0cm以上の大きさの破片とし、それを無加工の剥片と二次加工のある剥片とに分別した。破片は長さ2.0cm未満の大きさの破片である。製品、廃棄物ともに石材はほとんどサヌカイトであるが、わずかにチャートが含まれ

ており、各項目の中でこの両者が確認された場合はそれぞれの点数を記録した。

60区画のうち、完全な4m方眼で採集された地区は44区画で、残りの16区画は調査区の端にあたって面積が不足している。1区画から出土したサヌカイト、チャートの石器、廃棄物を含めた点数を記録したが、分布図作成にあたって面積不足の区画の点数を補正した(第6表)。補正の方法は占有面積が70%以上については単純に100%に換算した。70%未満については、100%換算では誤差が大幅に生じるおそれがあり、補正を要する区画の100%換算値と、その区画に隣接する区画の出土点数、あるいはそれが同じく面積不足ならばその100%換算値を可能な限り加え、加算した地区数で除して平均的な数値を求めた。水洗調査の対象区画はほぼ平面的に連続して設定したが、その中に調査の都合上採集されていない区画があり、やはり上記の方法と同様、隣接する区画(最大8区画)の数値を加算し平均値を求めて空白部に代入した。

これらの操作を経て求められたデータから分布図を作成した(第44図-2A)。これは製品と廃棄物すべてを合算した数値をもとにしている。合計64区画がこれに該当する。北東から南西にかけて長さ70m、幅10~15mの分布範囲が示されている。同図の矢印部分で切った、出土点数を示した縦断グラフを呈示した(第44図-2B)。これは1区画のX・Y軸の交点に、その周辺4区画の平均数値を与え、また北東から南西にかけて区画の交点

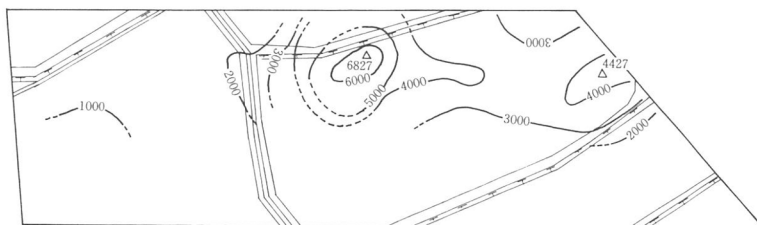
を対角線上に結んだ軸線を仮想し、1区画内の軸線中点にその区画の数量を代表させて作成した。これらによると、ほぼ中央部に突出した分布のピークが現れている。

第45図-1の等量線図は分布をより明確に把握するため、4区画の中心点に平均値を代入して作成した。1000点単位の等量線では、J11CX・DXに6000点以上のピークが現れ、その周辺5m前後の範囲で3000点台まで急減し、それ以遠ではやはり南西部での減少が特徴的である。北東部ではJ07WC・XCで4000点台の小規模なピークがあり、それを頂点として東西方向に漸減の傾向がある。

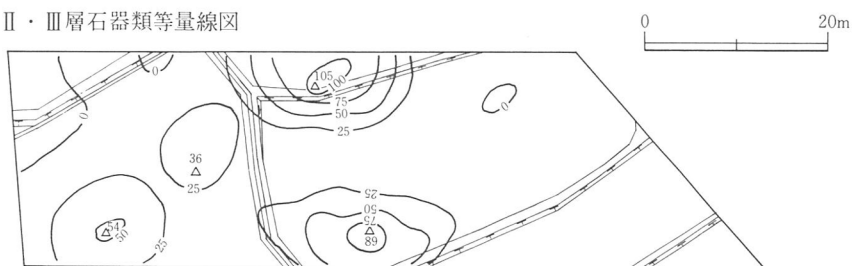
II・III層から出土した石器遺物はフルイにかけていないため、数量的にI層のそれと大きな開きがある。総量は2213点を数え、分布図(第44図-3)に示すような状況を呈する。25点単位で作成した等量線図(第45図-2)ではJ11CW・DWに100点以上の第1のピークがある。その周辺5~10mの範囲で数量は25点台まで急減、また、J12EBで75点以上の第2のピーク、J11KWで50点以上の第3のピーク、J11GV・GW・HV・HWで25点以上の緩やかな第4のピークがあるが、南東隅では全く検出されない地域があった。

以上のような遺物分布が何を表しているのか、平面分布を中心にして、包含層の残存度も考慮に入れ検討を加えることにしよう。平面分布をみると、II・III層で明らかになった第1の分布最高値を示す地区は、やや東に流れる傾向があるが、I層でもほぼ忠実に反映されているといえよう。その密度は他の地域と比較して著しく突出するのが大きな特徴で

45-1 I層石器類等量線図



45-2 II・III層石器類等量線図



第45図 F区石器類等量線図

ある。またⅡ・Ⅲ層にみられる第3の緩やかなピークは、Ⅰ層のJ11FV・FWを取り込む2000点の等量線の緩い突出部と関連する可能性がある。Ⅰ層のJ07WC・XCに現れた第2のピークは、下層の状態との直接的な関連は認め難いが、全体的にその周辺の密度は高い傾向にある。これとともにJ11に存在する遺物集中部の裾野をめぐる、4000点の等量線が北東へ延び出してJ12AAを取り込んでいる。

次にⅢ層の残存度は、層序で述べたように調査区が傾斜地にあり、水田1枚について標高の高い部分ではⅢ層がⅣ層とともに大きく削平を受けていた。しかし、同一水田内でも標高が低く、削平の度合いも低いと考えられる地区において、必ずしもⅢ層中に包含される石器類が均質に存在するのではなく、明瞭な粗密が生じていることは一目瞭然である。Ⅲ層自体が過去の耕作土であり、また耕地化に伴って根こそぎ攪乱されていることは明らかであるが、こうした大きな分布の粗密の差は偶然には生じない。これが本来の分布の状態をかなり正確に反映するものと考えられる。F区の南西隅のJ11JR周辺はこの区画の中で最も標高が高く、削平の度合いが低いと考えられる地域であるが、検出遺物数は激減している。この事実も上記の考えを補うものであろう。そして、この本来の分布に削平というマイナスの要因が加わり現在の分布状態を形成したのであろう。つまり、本来はⅢ層中においてJ11DWからJ12EBを中心に東西方向に連続した遺物の分布を示していたものが、Ⅲ層の削平とともに中央部でその連続性が切断されたと考えられるのである。耕土形成のメカニズムにはなお不明な点が多いが、削平されたとしてもその土砂は、他所へ運び出されるわけではなく、そのままⅠ層に転化していったのであろう。このようにⅡ・Ⅲ層の削られた部分がⅠ層へ転化している蓋然性が高いことを考慮して、以下のように推定してみよう。すなわちⅠ層の遺物分布のピークが下層と比べて東に流れる傾向を示すのは、Ⅱ・Ⅲ層でみられた第1と第2のピークをつなぐはずの等量線の隆起が、Ⅰ層に引き継がれて反映していると考えられる。ゆえにⅠ層は全面調査でないために確認できなかったが、調査対象区画以外の遺物集中部東側に連続した分布がみられた可能性は高い。なお、サヌカイトの保存状態は、剥片、碎片等は度重なる耕作によって摩耗が著しい。製品も新しい破損部をもつ個体が多い。

その他、石器類のほかに、Ⅲ層から北白川下層式の縄文土器が検出されたことはすでに述べた。注目すべきはその分布で、石器類のそれと極めて密接な関係を持っていることが、第41図から明らかである。出土点数5点という微量な出土量ながら、そのうち4点までJ11BW・CV・DWから検出され、石器類のピークと同じ傾向を示しているのは決して偶

然の産物ではないだろう。

サヌカイトの石器類はⅠ～Ⅲ層の包含層だけではなく、遺構埋土からも出土している。8世紀中葉の17-O S、11世紀中葉の24-O Sの埋土についてサンプル調査を行った。その量は埋土15000cm²あたり、17-O Sからは上層で剥片4点、碎片159点、下層で碎片94点、また24-O Sからは北西側で石鏃1点、碎片41点、北東側で碎片27点を検出した。

Ⅰ～Ⅲ層から出土する遺物の取り上げは層位的に分別して行った。しかし、いずれの地層も後世の攪乱を受けているため、遺物に層位学的な意味を持たせるのは無意味である。ただし、Ⅰ層とⅡ・Ⅲ層とは調査方法が全く異なり、遺物は特に個体の大きさによって取り上げ精度が大幅に違うため、Ⅰ層とⅡ・Ⅲ層の遺物を分けて報告した。なお、Ⅱ・Ⅲ層の遺物には、Ⅳ層上面に形成された後世の遺構埋土に混入した遺物を併せて報告する。

Ⅰ層出土遺物は石器として石鏃、石錐、刃器、異形石器、楔形石器があり、また廃棄物に剥片、碎片、石核がある。製品、廃棄物を含めたサヌカイト類および微量のチャート類が1点出土するための平均面積は53.48cm²である。調査精度の相違もあって、その密度は他の地区とは比較にならないほど高い。

石鏃は総数1567点が出土した。そのうち10点がチャート製で、他はすべてサヌカイト製である。完存品およびほぼ完存した個体は191点で、破損品が全体の87.8%と高い比率を占めている。破損部位は先端部、基部（逆刺部）が多い。このため、回収した石鏃の個体数を知ることは困難であるが、すべての個体が接合する保証のないことを承知の上で、数値を復元するため以下の方法をとった。完存品を除いて破片の残存部位の数量を集計し、先端部は543、基部は801の数値を得た。基部には逆刺を持つ凹基式と、それを持たない平基式を含めており、円基式、尖基式は含まれない。また、同一個体で先端部と逆刺の片側を保存するものとともに集計し、先端部、基部ともに欠損した個体は0として集計しなかった。凹基式、平基式についていえば、基部は基本的に一対で1個体を形成するため、単純に計算すると401個体の数値が得られる。しかし、この場合は先端部の数量が多いので、完存品との数値を合算した734点が計算上で得られる最低限の個体数である。基部形態からオーソドックスにⅠ～Ⅳ類まで分類を行った。

Ⅰ類は凹基式である。挟入の度合いでⅠa類とⅠb類に分別、刃部形態等で他のⅠ類と異なった特徴を持つものをⅠc類とした。数値的な処理は行わず、主観的に分類した。

Ⅰa類は挟入の極めて浅い一群である（121～133）。意図的に挟入をつけたか否か不明な個体も含めた。形状は正三角形か二等辺三角形で、刃部は直線もしくは外湾する。概ね

長さ2.0cm前後の個体群と、1.5cm前後の小形の個体群がある。前者は比較的丁寧な調整剥離を施す。後者は素材として小形で薄い剥片を利用しており、周辺に形状を整え刃部を付けるための急角度の細かい調整剥離が認められ、主要剥離面をよく残す個体が多い。

I b類は抉入の深い一群で(134~145)、長さ2.0cm前後の個体群と、1.3cm前後の個体群とがある。刃部の形状は直線、あるいは外湾し、抉入の形状は緩やかに円弧を描くU字形のものと直線的なV字形のものがある。全体の平面的な形状は正三角形、二等辺三角形に近い。(145)は今回の調査で検出された最小の石鏃である。

I c類は抉入が明瞭であるが、全体の形状や刃部形態がI b類とは異なり数量的に少ない一群を一括した(146~157)。刃部は内湾したもの、刃部に稜をもつものがある。

II類は平基式で(158~168)、正三角形、二等辺三角形が基本形態である。I a類、III類との区別が困難な個体も含まれる。刃部が内湾し、基部が幅を広げる個体群がある(165~167)。扁平な薄い剥片を利用しているので石鏃としたが、石錐の可能性を残す。

III類は円基式である(169~175)。涙滴型の個体や、刃部が内湾して基部が開く個体がある。また基部が円弧を描かず、左右が非対象形をなす一群もある。

IV類は尖基式で(176~185)、長さ3.5cm前後の一群と2.0cm前後の一群がある。前者は幅に対して厚さがあり、やや厚めの剥片を素材とするようだ。丁寧な調整が施された個体が多い。後者は概して薄い剥片を用い、調整剥片が周辺のみ施され、腹面は主要剥離面がよく残される個体が多いが、全面的に調整を受けた個体も存在する。有茎の個体もあり(183・184)、両側縁の基部付近にやや強めの調整剥離を加え、小さな茎部を作出しているが個体数は少ない。(185)は大形の有茎式で、形状から弥生時代の産物であろう。

以上はすべてサヌカイト製のものであるが、その他チャート製の石鏃を図示した(186~191)。I a類、I b類、II類、III類がある。いずれも素材は粗質である。

石錐は総数16点が出土したが、そのうち6点を図化した(192~197)。材質はすべてサヌカイトである。大別すると把持部と作用部である錐部から構成される一群と、錐部のみの一群とがある。把持部は主要剥離面を残し断面三角形を呈するもの(192)、調整剥離を加えたもの(193・194)がある。錐部はやや扁平な個体(197)がある。

異形石器は総数7点が出土した(198~204)。材質はすべてサヌカイトである。対向する二方向、あるいは四方向にノッチをつけた個体を総称した。二方向にノッチを持つ個体は7点で、この一群はやや扁平でその形状に若干の変異が認められる。(204)は四方向にノッチを持ち、調整剥離は丁寧、他の個体群より厚めである。

未製品とは、製品に移行させる目的をもって石器製作者に取り上げられた剥片または石核のうち、製品に到達する以前の段階の個体群をさすと定義しておく。この個体群には製作工程諸段階の形状が保存されていると考えられる。工程の初段階では剥片もしくは石核に加工が少なく、判断が極めて困難であろうし、製品に極めて近い段階で放棄された個体も存在するかもしれない。ここで扱う未製品はすべて石鏃のそれと判断されるものであるが、以下の特徴に基づいて製品と未製品の分別を行った。つまり未製品は、製品より大形で調整剥離が粗く、平基式あるいは円基式で二等辺三角形もしくは正三角形を呈することが多い、という特徴を概ね満たした個体群である。ただし、IV類はこれから除外される。前述したように製品との線引きをどこに設定するか、判断のつきかねる個体があるため、点数の確定を避けておく。図示した未製品（205～211）は厳密にいえば製品ではないが、以上の理由により定義とは異なるけれども、統計処理するにあたって便宜的に石鏃製品の中に含めている。両面調整された個体（205～208・211）と、腹面未加工の個体（209）、背面未加工の個体（210）がある。後の刃部にあたる二側縁は、直線状、もしくは外湾状を呈する。（211）は他の個体とは異なって、調整剥離が周辺にのみ認められる。

刃器は総数11点が出土した。刃器の中には削器、石匙が含まれる。遺存の良好な6点を図化した（214～219）。このうち（218・219）は石匙の範疇でとらえられる個体群である。刃器（214～217）は概ね横長剥片、斜軸剥片を利用しており、剥片末端部に刃部のための調整剥離を行った個体が多い。（214）は他の個体と比較して厚く、刃部はやや急角度である。（218・219）はともに横形であるが、調整は異なっている。（218）はおそらく斜軸剥片を使用してその末端部に把持部を作出し、辺縁を腹面側からの調整剥離によって刃部としている。（219）は横長剥片を使用して打点付近を把持部にあて、末端部を刃部として背面側から調整剥離を加えている。

楔形石器は2点が確認されたにとどまった（220・221）。ともに剥片を素材としており、背面には原礫面が残存している。いずれも対向する両縁に微細な階段状剥離が認められる。（220）の側縁には裁断面がみられない。

石核は総数68点、総重量714.35gが出土した。分類は行っていない。

剥片は総数2788点、総重量9620.06gが出土した。材質はすべてサヌカイトである。二次加工のある剥片として、剥片のうちで主要剥離面に2箇所以上のネガティブな面が形成されている個体を選別した。細かい分類は行いえなかったが、剥離の粗いものや、刃部様の細かい調整剥離が行われたもの、板状の剥片の周辺を割り取ったもの等がある。刃部様

の加工を施した個体を図示した（212・213）。これらの調整剥離は部分的であるが、両面から比較的丁寧に施されている。

破片は総数159676点、総重量25014.57gが出土した。材質はほとんどサヌカイトで、わずかにチャートを含む。チャートは赤色、緑灰色のものがある。

II・III層出土遺物には石鏃、石錐、刃器、楔形石器等の石器のほか、石核、剥片、破片がある。総出土点数は2213点、石器類が1点出土するための平均面積は0.78㎡で、同一の調査方法を実施した他の地区と比較して非常に高い数値を示す。

石鏃は未製品を含めて36点が検出された。I～IV類がある（228～240）。I b類の大形の個体（228）は弥生時代の産物であろう。図示しなかったが、破片中に縄文時代の石鏃I類も含まれている。I c類の個体（236）はチャート製で、逆刺の形態に特徴がある。III類の個体（229）は木葉形で、大形である。IV類の（234・235）は、粗い調整剥離が部分的に加えられているので、未製品と考えられる。IV類の未製品はこの2点だけである。（237～240）は、他の形態の未製品と考えられる。基部は平基式と円基式とがある。

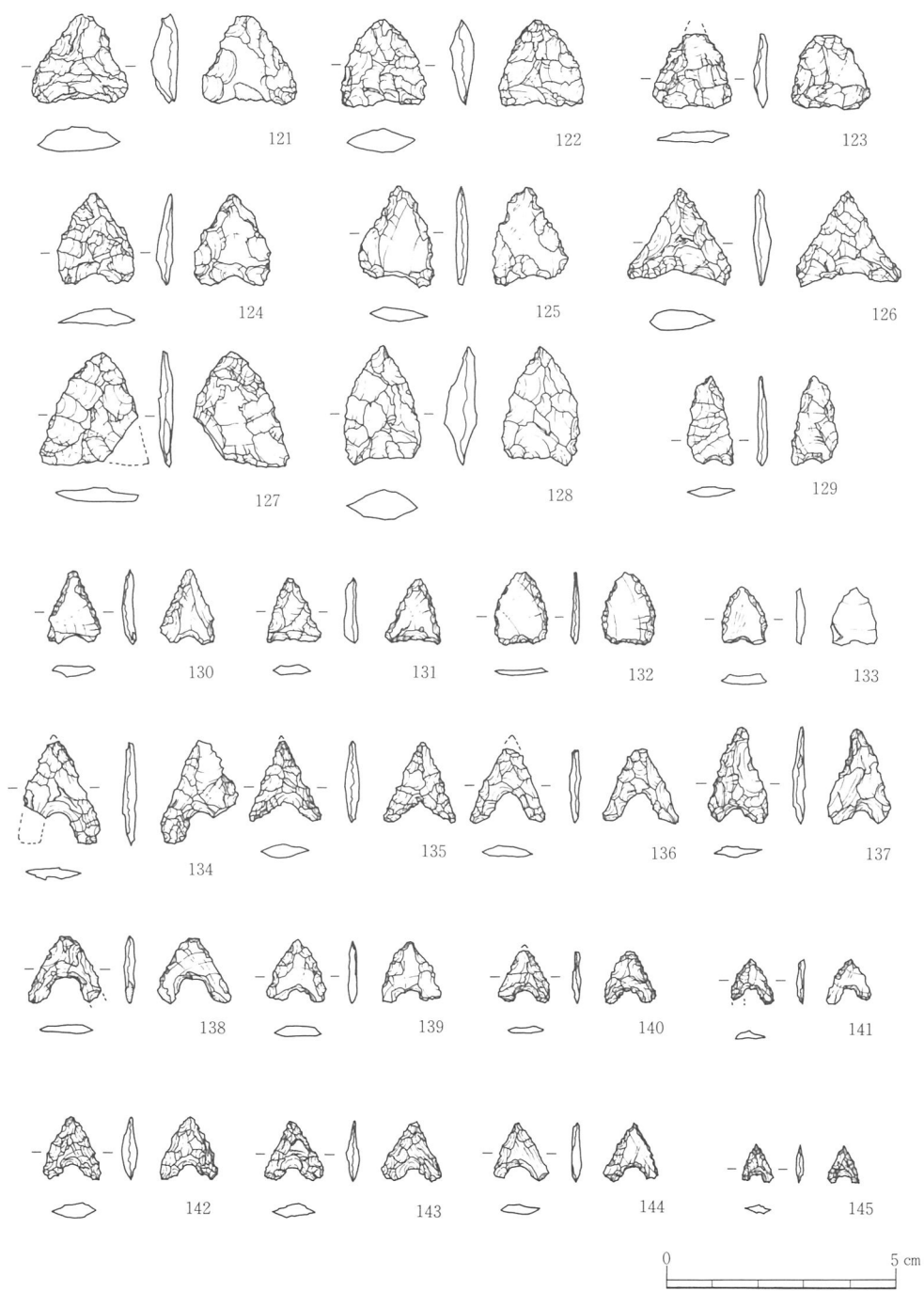
石錐は3点が検出された（241～243）。いずれも把持部を持つ形態である。

刃器は10点が検出され、7点を図示した。（244～246）はいわゆる削器で、いずれも横長剥片を使用し、末端部に刃部作出のための調整剥離を加える。調整剥離は片面または両面に及ぶ。（247）は受熱した個体で、末端部と打面部に調整剥離がある。（248～250）はいわゆる石匙である。（248・249）は三角形ではほぼ同一の形態をとり、調整面でも横長剥片を素材として打点付近を把持部とし、末端部に背面から刃部をつける点で共通する。（250）は破折により全体の形状は不明であるが、縦形になる可能性がある。

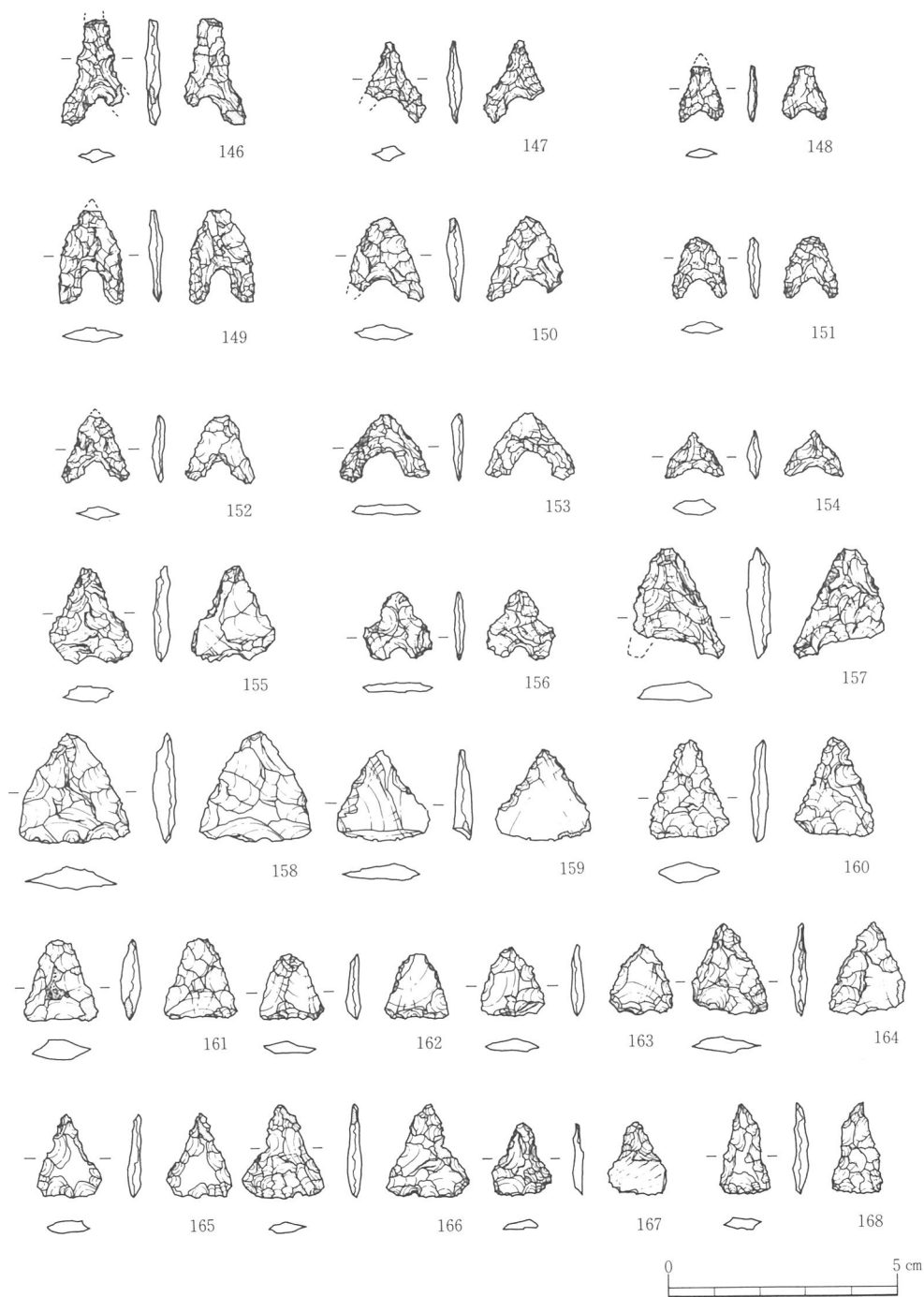
楔形石器は6点が確認された（222～227）。いずれも剥片を素材とし、3～5cmの四角形、もしくは台形状を基本的に呈する。対向する両縁には微細な階段状剥離が認められる。側縁には原礫面を残すものと、調整剥離面を持つもの、裁断面を持つものがある。

石核は152点が検出された。そのうち6点を図示した。（251）は亜角礫を素材として小形の剥片を作出した残核である。原礫面が石材の隅角部に残存している。（252）は亜角礫の両面から剥片を作出し、その結果三方に原礫面を残す薄い残核である。（255）はおそらく亜角礫を素材とする剥片を用い、一方から加撃することによって最終的に薄い残核となったものである。（253・254）は石核から破損した個体であろう。（256）は原礫面を背面に残し、両側から大きく剥片を割り取ったものである。

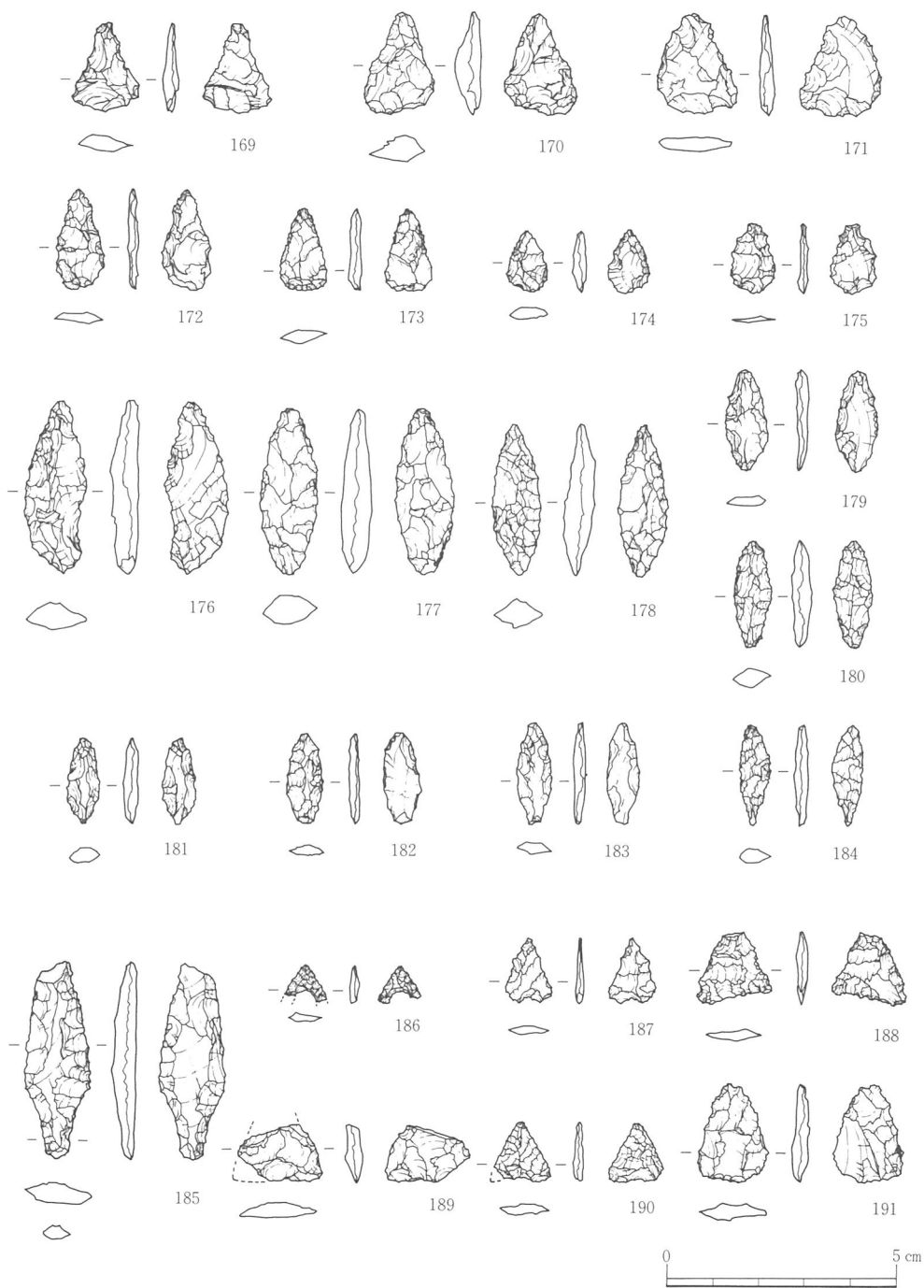
剥片は1326点、破片は686点が検出された。



第46图 F区包含层出土物实测图(3)



第47图 F区包含層出土遺物実測図(4)



第48图 F区包含层出土遗物实测图(5)